僕とみぃ姉とＦクラス

レフェル

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
僕とみぃ姉とＦクラス

【Ｎコード】
Ｎ４２９１Ｓ

【作者名】
レフェル

【あらすじ】
この小説は三つ子とテストと召喚獣をリニューアルした作品です。なぜ、リニューアルしたかというと正直いって男性主人公でしたいって思ったからというのと、姫路の双子の弟を主人公にしたかったから。
木下姉妹と美波にはそれぞれのお相手を考えてる最中です！あくまで予定ですけど（苦笑）

オリキャラデータ（前書き）

はい、三つ子をリニューアルしました！
もう、三つ子じゃなくね？と思った人、すいません（土下座）
どうしても男主人公での話を書きたかったんです。

オリキャラデータ

名前）
姫路亮（ひめじりょう）

性別）
男

年齢）
姉と同じ

一人称）
僕

身長）
１７８ｃｍ

容姿）
元々ピンク色の髪だったが男でそれは似合わないだろうから黒髪に変えた。
赤色のメッシュがはいっている。瞳の色は黒色。
イメージは『．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．』の『ハセヲ』に近い

性格）
基本的には礼儀正しいく、友人には『温厚』、外敵に関しては『冷酷』名前の通り『姫路瑞希』の弟で、軽いシスコンで性格はどちらかと言うと『常識人』・『苦労人』・『ブレーキ役』など『姉（瑞希）』の料理の『被害者（実験台）』である

趣味）
料理・アニメ鑑賞・ゲーム・サバイバルゲーム・剣道・薙刀・弓道・柔術・柔道・合気道など

科目）
現国：Ａ－　古典：Ａ－　英語：Ａ－　日本史：Ａ－　世界史：Ａ－　数学：Ａ－　物理：Ａ－　化学：Ａ－　保体：Ａ－　総合：Ａ＋

成績：Ｂクラス程度

召喚獣）
『．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．』の『ハセヲ（１ｓｔフォーム）』
点数が、『４００～６００点』なら『２ｎｄフォーム』・『７００～９００点』なら『３ｎｄフォーム』で、『９００点以上』は『Ｘｔｈフォーム』

腕輪）
名前『憑神（アバター）』容姿は『死の恐怖（スケイス）』
ＰＳ：点数で『憑神（アバター）』の容姿が変化する。

その他備考）
キレると一人称がオレに変化する。
この作品の主人公です！

オリキャラデータ（後書き）

次回から頑張るぞ～！！

オリキャラ設定

名前）
吉井真希（よしいまき）

年齢）
アキ兄と同じ

身長）
１５０ｃｍ

体重）
軽い

一人称）
あたし

性格）
明るくて優しく、お祭りごとも大好き。
あるいみ自由奔放な子

容姿）
金色の髪でふわふわツインテールで茶色の瞳。
体系は小柄で目は少し垂れ目で幼い幼女みたいな印象をあたえる。
胸はＣくらい。白いリボンがお気に入り。
イメージはバカテスの７．５巻のアキちゃんに似てる。

能力）
超直感。

完全記憶能力。
念動力（サイコキネシス）・精神感応（テレパス）・瞬間移動（テレポート）・物体氷結能力（クリオキネシス）・催眠（ヒプノ）・・・など。
この力で知っている人物は少ない。

備考）
アキ兄を傷つけるを人は許さない。
好きな物は猫。
嫌いな物は怖いこと。
宝物は猫のぬいぐるみ。
成績はＡクラス並。

召喚獣）
悪魔のような姿で槍を持っている。
真希をデフォルメしたような容姿。

名前）
坂本雪菜（さかもとゆきな）

性別）
女

身長）
１４２ｃｍ

容姿）
白色（銀色）の髪でロングヘアーで赤色の瞳。
儚げな印象

性格）

おなしくて優しくブラコンですっごくいい子。

特技）
絵を描くこと。

嫌いなもの）
病院、怖い人

好きなもの）
兄、翔子と翔子の弟

能力）
接触感応能力（サイコメトリー）

備考）
体が弱い為、走ることがあまりできない。
ぜんそく持ちでいつも携帯してる薬をもっている。
周りから儚げな印象をもたれており、常識は兄より劣るがあることはある。
雄二の双子の妹。
体調をくずすとすぐに病院につれていかれる。

「あの、頑張ります」

名前）
霧島翔夜（きりしましょうや）

性別）
男

身長）
１８０くらい

容姿）
翔子と似た容姿で常に微笑みを絶やさない。

性格）
穏やかで優しく姉想い。

備考）
成績はＡクラス。
翔子の双子の弟。とある事件が原因で心に傷をもっている。
雪菜とは友達だが、雄二に雪菜に会わせてもらえなかった過去がある。
学園では頬笑みの貴公子と言われているが、本人いわくどうでもいいそうだ。

「僕は後悔したくないんです」

キャラ設定

名前）
優花（ゆうか）

名字）
木下

性別）
女

性格）
・優しい
・お転婆？
・シスコン
・ブラコン
・明るい
・少し泣き虫？

容姿）
秀吉と優子と似た容姿
目は緑で少し眠そうな感じ

好きなこと）
音楽、ピアノ、兄（秀吉）と姉（優子）といること
絵を描くこと

嫌いなこと）
兄（秀吉）と姉（優子）をいじめる人

得意科目）
物理、音楽、家庭科

苦手科目）
歴史、日本史

備考）
ちょっとした事故で右足に傷をおっており、走ることができない。
そのため、右足をびっこひいて歩いていることがある
それにより、秀吉と優子は更に過保護になったとか。

キャラ設定（後書き）

優花の説明です

予習問題

「みぃ姉、大丈夫？」

「う、うん。大丈夫よ！」

どうも、僕は姫路亮です。
こちらにいるのは僕の双子の姉で姫路瑞希ことみぃ姉。
今、学校に向かって走っているんだけど。
瑞姉がふらふらとしていてどうにも間に合いそうもないんだよね。
そして、やっと校門前に着くとドスを聞かした声が聞こえた。

「遅いぞ、姫路姉弟」

声のした方を見ると、そこには浅黒い肌をした短髪の男の先生が立っていました。

「に、西村先生。ち、遅刻してすみません」

「西村先生、遅刻してすみませんでした」

僕とみぃ姉はふかぶかと頭を下げて謝ると

「今回が初めてだから、いいがな。
とりあえず、息を整えろ」

「は、はい」

この先生は西村先生といって目をつけられるとロクな目に遭わないらしいです。
あと生徒の間ではトライアスロンが趣味で、真冬でも半袖でいるので『鉄人』という渾名で呼ばれていたりします。

「落ち着いたか？」

「はい、なんとか…」

「そうか。まぁ、言わなくても分かると思うが」

そう西村先生は言うと僕とみぃ姉に二つの封筒を渡してきた。
それぞれの宛名には『姫路瑞希』と『姫路亮』と書かれていた。
この封筒はクラス編成が書かれているんです。

普通の学校なら、掲示板などに大きく張り出すものですが、
ここ文月学園は世界的にも注目されている最先端システムを導入した試験校なので、その一環としてこのような発表のやり方だそうです。

「しかし、残念だったな。二人とも試験を途中で退席しなければ、Aクラスに行けたのに」

「はい、私が体調管理をしていなかったばかりに亮を巻き込んでしまいましたから、反省してます」

「みぃ姉、僕はいつも言ってるでしょ？　みぃ姉の所為じゃないって！」

沈んだ面持ちで言う、みぃ姉に僕はムッとしながら言うと西村先生は苦笑いしていた。
そう、僕は試験途中で倒れたみぃ姉を背負って教室を出たんです。
あ、僕とみぃ姉は途中で抜け出したから点数は無得点なんですよ。
当然、僕らのクラスは……

『姫路瑞希……Ｆクラス』

『姫路亮……Ｆクラス』

「お前等、そろそろクラスに行った方がいいぞ」

「あ、そうですね！行きましょう、亮」

「うん、みぃ姉」

これから、僕らの最低クラスでの生活が幕を開けました。

予習問題（後書き）

感想と評価を楽しみにしてます！！

バカテスト　第一問

第一門

問　以下の問いに答えなさい

調理の為に火にかける鍋を制作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した

この時の問題点とマグネシウムノ代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい

姫路瑞希と姫路亮の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例……ジュラルミン』

教室のコメント

正解です。
合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さん達は引っ掛かりませんでしたね

土屋康太の答え
『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント
そこは問題じゃありません

吉井明久の答え
『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント
すごく強いと言われても

吉井真希の答え
『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。
合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント
正解です。姫路さんと同様にひっかかりませんでしたね

バカテスト　第一問（後書き）

感想と評価を楽しみにしております！！

第1問

みぃ姉に急かされて駆け足で階段をのぼると、普通の5倍くらいの教室が視界にはいりました。

「凄い教室だね」

「うん」

みぃ姉と二人でホテルのような教室にあっけに取られていると、教室の中で見知った顔を見えた。

『霧島翔夜』くんです。彼とは去年に知り合ったんですよ。それから、翔夜君の姉さんの翔子さんと仲良くなり、今では恋愛相談なんかも聞かされています。

周りの人たちに『代表』と呼ばれているから、このクラスの代表なのでしょう。

「亮、そろそろ行かない？」

「あ、うん」

みぃ姉に言われて我にかえると僕は瑞姉と一緒に教室に向かって急ぎました。

二年F組と書かれたプレートのある教室の前まで来ました。

先程階段を駆け上がったため、みぃ姉が少し息切れを起こしていた。

みぃ姉は元々体が弱いので運動なども苦手なんだよ。

僕はそういうことがないから、みぃ姉にいつも羨ましがられていた

かな。
とりあえず、教室のドアを開けて中に入ったよ。
「あの、遅れて、すいま、せん……」
「あの、遅れてすみません」
『えっ？』
僕達が教室に入ったとたん、教室全体から驚いたような声が上がった。
まぁ成績的には僕もみぃ姉もＡクラス並みなので無理もないけどね……
「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんと姫路君もお願いします」
「は、はい！」
「わかりました」
「あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします……」
小柄な体をさらにちぢこめるようにして声をあげるみぃ姉。
緊張しているのがまるわかりだね。
「僕は姫路亮です。よろしくお願いします……」

『はいっ！　質問です』

一人の男子生徒がみぃ姉と僕に質問してきた。

「あ、は、はい。なんですか？」

「なんでしょうか？」

『なんでここにいるんですか？』

この質問聞きようによっては失礼だね。

Aクラスに行くだろうと言われていた僕達がなぜここにいるかはクラス全員の疑問だろうね。

「そ、その、ですね……」

緊張した面持ちで体を固くしながらみぃ姉は答える。

「振り分け試験の最中、高熱を出してしまいまして…」

「僕は瑞姉を連れて途中退室をしたんですよ」

その言葉を聞き、クラスの皆は『ああ、なるほど』と頷いた。

試験途中での体積は0点扱いとなる。

結果としてFクラスに振り分けられてしまった。

『そう言えば、俺も熱（の問題）が出たせいでFクラスに』

『ああ。化学だろ？あれは高難度だったな』

『俺なんか、事故にあった弟が心配で集中できなくて』
『ああ、お前には妄想の弟がいたんだったな』
『前の晩彼女が寝かせてくれなくて』
『異端者だ！』
『嘘です！すんません！』
これは想像以上にバカだらけだ。
「で、では、一年間よろしくお願いしますっ！」
「一年間よろしくお願いします」
そんな中逃げるようにしてみぃ姉は明久と雄二の隣に空いてる卓袱台に着く。
僕は真希ちゃんの隣に座ったよ。
「き、緊張しましたぁ～……」
席に着くや否や、安堵の息を吐いて卓袱台に突っ伏した瑞姉。
それを見て明久が話しかけようとしている。
きっと雄二が邪魔するんだろうな。
「あのさ、姫路さん」
あれ、明久がみぃ姉に声をかけてる。
雄二は雪菜ちゃんのことでそれどころではないのかな？

「は、はいっ。何ですか？　え、吉井君！？」
みぃ姉が明久の顔を見て驚いてるよ。
そして明久がそれにショックを受けているようだね。
にしても、みぃ姉は驚きすぎだよ。
明久が落ち込んでるじゃないか。
「兄さん、自己紹介はいいのですか？」
「あ、ああ。そうだな」
雪菜ちゃんが雄二に話を振ると雄二が僕等に近寄った。
彼は坂本雄二といって翔夜の話だと翔子ちゃんの旦那さんになる人で自分の兄にもなるとか。
もう、親公認なのかな？
「姫路、もう体調はいいのか？」
「あ、はい。亮と仲良くしてくれてる坂本君ですよね？」
「あぁ、坂本雄二だ。亮から聞いてると思うが一応よろしくな」
「はい」
みぃ姉と雄二が会話していると真希ちゃんが声をかけた。
「瑞希ちゃん、久しぶりです」

「真希ちゃん!?なぜ、ここに?」

「アタシは体調不良で全力を出せなかったんです」

「それは、残念でしたね」

「それでも、アキ兄と居られますので」

「ふふっ……真希ちゃんは本当に吉井君が大好きなんですね」

「もちろんです」

真希ちゃんとみぃ姉が仲良く話している。

「雪菜ちゃん。もう体調はいいの?」

「心配してくれてありがとう、大丈夫ですよ」

僕は雪菜ちゃんに話しかけると雪菜ちゃんは笑顔で答えてくれた。
体弱い子だから、雄二が心配する気持ちはわからなくもないよ。
僕だってみぃ姉のことが心配だしね。
シスコン?僕は軽いシスコンだと思うよ?

「はいはい。　そこの人達、静かにしてくださいね」

雪菜ちゃんと話していると明久達が福原教諭に注意されてしまってた。
3人が居住まいを正して謝ろうとした瞬間。

バキィッ　バラバラバラ……

教卓か音を立てて崩れ落ちた。寿命だったのかもしれない。

「……えーと、替えを用意してきます。みなさんはしばらく待っていて下さい」

福原教諭は気まずそうにそう告げると足早に教室から出ていった。

「あ、あはははは……」

苦笑いする、みぃ姉を見てから、明久は雄二と僕に声をかけていた。

「…雄二に亮、ちょっといい？」

「ん？　なんだ？」

「はい？　なんですか？」

「ここじゃ話にくいから、廊下で」

「別に構わんが」

「わかりました」

立ちあがって廊下に明久達と一緒に外に出た。

真希ちゃんは雪菜ちゃんと楽しそうに会話をしていました。

「それで、話ってなんだ？　断っておくけど俺は男に興味は無いからな？」

「雄二が僕をどういう目で見ているか聞きたいよ？
まあ、今は置いとくけど。そうじゃなくてこの教室についてのことなんだ」

「Ｆクラスか。想像以上に酷いもんだ」

「酷すぎますよね」

「雄二と亮もそう思うよね？」

「もちろんだ」

「はい」

「Ａクラスの設備は見た？」

「ああ、凄かったな。あんな教室見たことがない」

「そこで、僕からの提案。折角２年生になったんだし、＜試召戦争＞をやってみない？」

「戦争、を仕掛けたいと？」

「いきなりですね」

「うん。しかもＡクラス相手に」

「……なにが目的だ？」

雄二は目を鋭くしながら明久に尋ねます。

「いやぁ、だってあまりに酷い設備だからさ」

「嘘をつくなよ。全く勉強に興味のないお前が、今更勉強用の設備なんかの為に戦争を起こすなんて、そんなことはありえないだろうが」

「そ、そんなことないよ。興味がなければこんな学校にくるわけが――――――」

「お前がこの学校を選んだのは、＜試験校だからこその学費の安さ＞が理由だよな？」

なかなか鋭い発言だね。

「……姫路のためか？」

「な、なぜそれをっ？！」

「バカ、カマを掛けただけだ」

楽しそうに雄二は笑う。からかうのが好きな男ですね。

「ま、気にするな。Ａクラス相手の試召戦争なら俺もやるつもりだったからな」

「へっ？！　雄二も勉強なんかしてないよね？」

「雄二は世の中学力だけじゃないってことを証明してみたいんだそ

うですよ。
それと雪菜ちゃんの為でもありますよね」
「お前……」
「ふふっ……僕を侮らないでくださいね」
「???」
明久は不思議そうだね。
「それにAクラスに勝つ作戦も思いついたし……おっと、先生が戻ってきた。教室に入るぞ」
「あ、うん」
雄二が先に入るとタライが降ってきた。
ガイン!!
「がっ!」
「ゆ、雄二!!?」
なんと古典的なトラップが発生しましたか。
ドドドッ
そして今度はモップまみれに。
真希ちゃんの仕業でしょうね、これは間違いなく。

そして、タライとモップを片付けてから、自己紹介が再び始まる。

「えー、須川亮です。趣味は……」

そんな風に自己紹介が続き、最後に福原教諭が雄二に声を掛けた。

「最後にFクラス代表の坂本君。君の自己紹介をして下さい」

「了解」

答えて雄二は立ち上がり、ゆっくりと前に出た。

その雰囲気に、Fクラス中の視線が集まる。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは、ま、坂本でも代表でも、好きに呼んでくれ」

そこで、少し……間を空けた。間の開け方が上手いとやり方だ。

「さて……みんなにひとつ聞きたい」

言いながら皆と視線を合わせる。

そして、流れるように教室各所に視線を移していくと、みんなの視線も自然とそれを追っていた。

カビ臭く、すき間風が通る教室。

古く、うす汚れて綿もスカスカな座布団。

汚れた上に、脚もガタガタな卓袱台。

最後に皆を見据えると口を開いた。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが……」

ひと呼吸置くと、確認するように告げる。

「不満はないか？」

『『『『大アリじゃあっ！！！！！』』』』

教室を揺るがす、魂の叫びだ。

「だろう？　俺だって不満だ。このクラスの代表として、大いに問題意識を抱いている」

雄二は仰々しく同意する。すると、あちらこちらから不満の声があがり始めた。

『いくら学費が安いからって、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！』

『そもそもAクラスだっておなじ学費のはずだ！　あまりにも差が大きすぎる！』

『そうだそうだ！』

それらをまとめ、引き継ぐように雄二は口を開いた。

「みんなの意見はもっともだ。そこで、これは俺の代表としての提案なんだが」

自信たっぷりに、野生味溢れる笑顔で、言い放つ。

「Ｆクラスは、Ａクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けようと思う」

彼、坂本雄二は戦争の引き金を引いたのであった。

第1問（後書き）

感想と評価を楽しみに待ってます！！

バカテスト　第二問

問　以下の意味をことわざを答えなさい。

『（1）得意なことでも失敗してしまうこと』

『（2）悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え《たとえ》』

姫路瑞希と姫路亮の答え

『（1）弘法も筆の誤り』

『（2）泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも（1）なら『河童の川流れ』や『猿も木か落ちる』、（2）なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね

土屋康太の答え

『（1）弘法の川流れ』

〔教師のコメント〕

シュールな光景ですね

坂本雪菜の答え

『（1）猿も木から落ちる』

『（2）踏んだり蹴ったり』

〔教師のコメント〕
正解です、亮君に教えてもらったんですかね？

吉井真希の答え
『（1）猿も木から落ちる』
『（2）弱り目に祟り目』

教師のコメント
正解です。お兄さんのよくない部分をもらわないように。

吉井明久の答え
『（1）猿も木から落ちる』
『（2）踏んだり蹴ったり』

教師のコメント
なん……だと。驚きました、正解です。

第2問（前書き）

ＦＯＯＬ様

感想ありがとうございます♪

すっごく嬉しかったです！！

亮「これからもこの小説を応援していてくださいね」

第2問

Aクラスへの宣戦布告。
それはこのFクラスにとっては現実味の乏しい提案にしか思えなかった。

『勝てるわけ無いだろう』

『コレよりひどい設備なんてあり得ない』

『姫路さんがいれば何もいらない』

『真希ちゃんを抱きしめたい』

そんな悲鳴が教室内のいたるところから上がっています。
一部おかしなセリフも交じっていたが、気にしないでおきますか。

確かに誰が見ても、AクラスとFクラスの戦力差は明らかです。

文月学園では、点数の上限がないテストが採用されていますし。
一時間の制限時間内に、無制限にテスト問題を解いていくことが出来るのです。
テストの点数に上限はなく、能力次第でどこまでも成績を伸ばすことができるといわけです。
そして、科学とオカルトと偶然から生まれた、『試験召喚システム』
これは、テストの点数に応じた強さを持つ　『召喚獣』を呼び出して戦うことのできるシステムで、教師の立ち会いの下で行使が使用可能になるのです。

学力低下が嘆かれる昨今、生徒の勉強に対するモチベーションを高める為に提案された先進的な試み。
その中心にあるのが、召喚獣を用いたクラス単位の戦争……試召戦争と呼ばれる戦い。

その戦争で重要なのがテストの点数だ。AクラスとFクラスの点数は文字道理桁が違います。
正面からやりあっても、Aクラス一人に対してFクラス三人でも勝てるかどうかは分からないというわけです。
どうあがいても勝つことなど不可能としか思えないのですが、どうする気なのでしょう。
だが、雄二はそれを否定してみせるような言葉を発言しました。

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、勝たせて見せる」

圧倒的な戦力差を知りながらも、雄二はそう宣言したのです。

『何をバカなことを』

『できるわけないだろう』

『何の根拠があってそんなことを』

『そんなことより、真希ちゃんを愛でたい』

否定的な意見が飛び交うが、また、おかしな意見も出てきたました。
いったい誰なのでしょう？

「根拠ならあるさ。このFクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」

「要素？」

雄二が自信満々に笑って言うと雪菜ちゃんが呟きました。

「それを今から説明してやるよ」

得意の不敵な笑みを浮かべ、壇上から皆を見下ろす雄二。
それを雪菜ちゃんは心配そうに雄二君を見ていますね。

「おい康太。畳に顔つけて姫路のスカートを覗いていないで、前に出てこい」

「……！！　（ブンブン）」

「ひゃわっ」

雄二に呼ばれた少年、土屋康太は必死に顔と手を横に振って否定します。
みぃ姉が慌ててスカートを押さえて離れると、顔についた畳の痕を気にしながら壇上へと歩き出しました。

「土屋康太。こいつがあの有名な、寡黙なる性識者（ムッツリーニ）だ」

「……！！（ブンブン）」

『ムッツリーニ……だ……と？』

『ヤツがそうだというのか？バカな……』

『だが見ろ。ああまで露骨な覗きの証拠を、未だに隠そうとしているぞ……』

『ああ……まったくだな。ムッツリの名に恥じない姿だ……』

畳の痕を手で押さえている姿が果てしなく哀れを誘う。

「???」

ただひとり、みぃ姉だけが、訳が分からないという顔で首を傾げています。

「姫路姉弟は説明不要だろう。その実力はみんなが知っている通りだ」

「えっ！　わ、私がですかっ？」

「僕もですか？」

「ああ、ウチの主戦力だ。期待している」

突然に話をふられて慌てるみぃ姉。僕は平然と言うとそれを見て頷く雄二。

『ああ、そうだ。俺たちには姫路さんがいるじゃないか』

『たしかに彼女ならAクラスに引けをとらないな』

『まったくだ。彼女がいれば、ほかに何もいらないな』

『真希たん、かわゆす！！』

『雪菜ちゃん、嫁に来て～！！』

さきほどから、みぃ姉や真希ちゃんと雪菜ちゃんにラブコールを送る輩が増えていますね、どうしましょう。

「木下秀吉だっている」

「む？　ワシか？」

『おお……！』

『確かアイツ、ここにいる木下優子の……』

「当然、この俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな雰囲気があるよな』

『そういえば、坂本のヤツは、小学生の頃は神童とか言われてたらしいな』

『てことは、振り分け試験の時は体調不良かなんかだったのか』

『なんだよ、Ａクラスレベルが二人もいるんじゃないか、このクラス』

いけそうだ、やれそうだという雰囲気が教室内で満ちている。

「それに、吉井明久だっている」

が、一気に冷めた。

「ちょっ？！　雄二っ！！　どうして僕の名前がそこででてくるのさ！

ぜんぜんそんな必要なかったよね？！　今！」

『……誰だ？　吉井明久って』

『いや、知らん』

『誰だっけ？』

「せっかく、もり上がっていたのに、翳りが見えてきたし！　わざわざ、もり下げる必要あるの！？」

「なんだ、みんな知らないのか？　こいつは《観察処分者》だ」

「なんでバラすのっ！」

『それって、バカの代名詞じゃなかったか？』

「ち、違うよっ！ちょっと、おちゃめな１６歳につけられる愛称で」

「そうですよ。今のアキ兄はＣクラスの成績を誇っているですよ？」

真希ちゃんが笑顔で言う辺り、周りのざわめきが静かになります。

「あの、《観察処分者》というのはどういうものなんですか？」

手をあげてみぃ姉が聞いてきます。

「具体的には教師共の雑用係だ。力仕事とかそういった類の雑用を、特例として物に触れるようになった試験召喚獣でこなすといった具合だ」

本来試験召喚獣は物に触ることが出来ませんが観察処分者である明久のだけは特別です

「そうなんですか？それって凄いですね。試験召喚獣って見た目と違って力持ちって聞きましたから、そんなことができるなら便利ですよね」

みぃ姉がキラキラした目で明久をみています。

「あはは。そんなたいしたもんじゃないんだよ。教師の監視下てなければ呼び出せないし、試験召喚獣が受けた負担の何割かがフィードバックして返ってくるんだよ」

つまり重いものを明久の試験召喚獣に持たせて校舎内を走り回らせればその疲労が明久に返ってくるわけです。

それこそが《観察処分者》がバカの代名詞と呼ばれる理由です

『おいおい。《観察処分者》ってことは、試召戦争で召喚獣がやられると本人も苦しいってことだろ？』

『だよな。それならおいそれと召喚できないってことだよな』

確かに普通の《観察処分者》ならその通りです
しかし…

「おいおい、さっきも真希が言ってただろ？明久の成績はＣクラス並だ。
そんな明久がおいそれと簡単にやられると思うか？
ましてや《観察処分者》なら他の奴よりも召喚獣の扱いに長けている。
《観察処分者》と高得点、この２つがあるから明久はクラス最強なんだ」

「雄二、あんまり褒めないでよ。照れちゃうよ」

明久を褒めているな～、雄二にしては珍しいことだよ。

「そして、（特別処分者）というのは知っているか？」

「確か、今年の成績はいいのに普段の生活態度が悪い奴にあたえられるという」

「そうだ。吉井真希はその称号を持っている。」

『なんだって！？』

『高成績でその称号を持つ奴がこのＦクラスにいるとは！！』

ざわざわと騒がしくなる。そもそも特別処分者というのは観察処分者とかわらないのですが。

違う点があるというなら、召喚獣に召喚者の意識が乗り移るみたいな感じになるわけです。
あ、本来の肉体も操作可能ですよ。
意識が二つにわかれて召喚獣と本来の肉体にも意識があるというしくみですので。
肉体が無防備だと万が一のこともありますからね。

「まずは小手調べにDクラスを攻め落とす」

「みんな、今のこの境遇には我慢がならないだろう？」

『当たり前だ！！』

「ならばペンを執れ！　出陣の支度を始めるぞ！」

『おおーーっ！！』

「「お、おー……」」

周りに流されながらみぃ姉と雪菜ちゃんが腕を上げます。
無理しなくていいのにな。僕もできるだけ頑張ろうかな、みぃ姉と雪菜ちゃんの為にも、ね。

第2問（後書き）

感想と評価を楽しみに待ってます！！

バカテスト　第三問

問．以下の英文を訳しなさい

Ｔｈｉｓ　ｉｓ　ｔｈｅ　ｂｏｏｋｓｈｅｌｆ　ｔｈａｔ　ｍｙ　ｇｒａｎｄｍｏｔｈｅｒ　ｈａｄ　ｕｓｅｄ　ｒｅｇｕｌａｒｌｙ

姫路瑞希と姫路亮の答え

これは私の祖母が愛用していた本棚です

『教師のコメント』

正解です。　きちんと勉強していますね

『土屋康太の答え』

これは

『教師のコメント』

訳せたのはＴｈｉｓだけですか

吉井明久の答え

☆●◆▽「♪＊×

『教師のコメント』

できれば地球上の言語で

吉井真希の答え

これは、私の祖母が愛用していた本棚です。

『アキ兄、それはイタリア語ですよ』

〔教師のコメント〕

正解です。……なんですと!?

第3問

「明久にはDクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」

「……下位勢力の宣戦布告の使者ってたいてい酷い目に遭うよね」

「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」

「本当に？」

「もちろんだ。俺を誰だと思っている」

「アキ兄より、適役はいるではないですか」

「あ？誰だ？」

「美波かアタシです」

きっぱりと宣言する真希ちゃんを見て雄二は石化したように固まりました。

「ちょっと！どうしてウチが！！」

「なんですか？アタシのお願いが聞けないのですか？」

「うー（汗」

美波は真希ちゃんの迫力に冷や汗をかいてます。
美波ちゃんは真希ちゃんが苦手なのでしょうけど、これは日頃の行いが行いですしね。
「真希が行ったらクラスが壊滅するだろうが！！」
「それが、なにか？」
真希ちゃんは雄二に笑顔で言った、突然須川君が立って。
「俺が行く！！真希さんにそんなことさせられない！」
「須川君、優しいんだね」
「い、いや」
真希ちゃんが笑顔で須川君に言うと照れました。
うん……ヤッテイイデスカ？

「では、行ってくる！」
「うん、逝ってらっしゃい」
「字が違いますよ！？」
思わず僕は明久にツッコミをいれるが、須川君には聞こえてなかったのでしょうね
そのままDクラスへと向かってしまいました。

「ぎゃあぁぁぁっ！！！」

その後須川の悲鳴が聞こえてきました。

そして数分後須川は帰ってきたのですが、見事にボロボロでした。

「い、行ってきた」

「須川君、お疲れ様です」

真希ちゃんは笑顔でいうと須川の手当てをする。

羨ましい、妬ましいという感情にかられる僕がいたのは内緒です

「須川も帰ってきたし、お前等作戦会議するから、屋上に行くぞ」

雄二がそう言うとさっさと出て行きました。

その後を僕達は続いて出ていきます。

屋上に通じる扉を開けてくぐると、太陽の下にでると雲ひとつない青空に、

優しい春風が吹いてました。

その春の日差しに、はためくみぃ姉のスカートに注視するムッツリーニ以外のメンバーは目を細めます。

てか、みぃ姉のスカートを注視するなよ

「須川、宣戦布告はしてきたんだな？」

「ああ、今日の午後の開戦予定だ」

「なら、先にご飯だね」

「そうなるな。しっかり腹ごしらえしとけよ？　明久」

「わかってるよ」

「アキ兄のお弁当はバッチりです」

真希ちゃんは笑顔で言うとなぜか驚かれたように全員が明久と真希ちゃんに注目しました。
いったいどうしたのでしょうか？

「あんた、料理できるの！？」

「その言い方はなんですか。失礼ですよ」

「あ、ごめん」

ムッとしながら真希ちゃんが言うと島田さんは俯きました。

「真希と僕でそれぞれ料理当番を決めているから、できるんだよ」

「今日はあたしが担当だったんですよ」

「僕としては楽しみだなー、真希の料理は美味しいから♪」

それを聞くと島田さんとみぃ姉が落ち込んでいた。
島田さんはなんでかわからないけど、みぃ姉は薬品料理をしないようにすればいいと僕は思うよ。

味は普通くらいになるはずだしね。
後、僕を料理の味見役にしないでほしいよ。
「この件は後にして試召戦争の話に戻ろう」
この場にいる全員は雄二を見ます。
「雄兄。一つ、気になっていたんですけど、どうしてDクラスなの？
段階を踏むならEクラス。勝負にでるなら直接Aクラスですよね」
「そういえば確かにそうですね」
「まぁな。当然考えあってのことだ」
雪菜ちゃんの質問に雄二が鷹揚にうなずきます。
「どんな考えなの？」
「色々と理由があるんだが、とりあえずEクラスを攻めない理由は簡単だ。
戦うまでもない相手だからだ」
「え？　でも、クラスは僕らより上だよ？」
「振り分け試験時点ではそうだったかもしれない。だが、実際はちがう。
明久、いまおまえの目の前にいるメンツをよく見ろ」
「えーっと……」

明久は雄二に言われた通りに周りのメンバーを見ます。

「美少女が3人と美幼女が1人と美少年が1人とバカが2人とムッツリが1人いるね」

「アキ兄、アタシはそんなにちっこくないです」

「誰が美少女だと！？」

「あ、落ち込まないで、真希！！てか、なんで雄二が美少女に反応するのさ！？」

「……（ポッ）」

「ムッツリー二まで！？どうしよう、僕だけじゃツッコミ切れない！」

「明久。僕、美少年ですか？」

「亮君はもちろんだよ！！」

と、明久が僕に宣言しました。

なんだか友達に言われると照れますね。

「要するにだ。姫路に問題がない以上、正面からやりあってもEクラスには勝てる。

俺たちの目標は、あくまでもAクラス。Eクラスとやり合っても、

得るものは無い。
だったらやる必要はないだろ？」
「Dクラスと、やり合う事に意味があるということですか？雄兄さん」
「その通りだ。ま、初陣でもあるし。派手にやって今後の景気づけにしたいからな。
それに、さっき言いかけた打倒Aクラスの作戦に役立つプロセスだしな」
「あ、あの！」
すると、不意にみぃ姉が大きな声をあげました。
「ん？　なんだ姫路」
「坂本君たちは、前から試召戦争について話し合っていたんですか？」
「ああ、それか。じつはさっき、姫路のためにって明久に相談されて」
「それはそうと！！」
雄二の言葉を遮るように、明久が大きな声を出します。
今思ったんですけど、よく声が出ますね
「さっきの話、Dクラスに勝てなきゃ意味がないと思うけど？」

「負けるわけがない」
明久の心配を笑い飛ばしてメンバーを見渡す雄二。
何か策でもあるんでしょうか？
「おまえ等が俺に協力してくれれば、必ず勝てる」
雄二は力強い言葉で言いました。
そうですか、僕はみぃ姉と真希ちゃんの為に頑張りますかね。
「いいか、おまえら。ウチのクラスは……最強だ」
根拠のない言葉だが、なぜかその気になるという雄二の言葉にはそんな力があったりします。
どうでもいいですけど。
「いいわね……面白そうじゃない！」
「なんかやれそうだって気になるね」
「そうじゃな。Aクラスの連中を引きずり落としてやるかの」
「できるだけ、頑張ります！」
「……（グッ）」

「が、頑張りますっ！！」

「僕も頑張ります」

そう皆がいい、士気が上がります。

さて、僕の成績は正直いってＢクラス程度なんです。
根気をつめればなんとかＡまではいけると思いますけど。
まぁ、なんとかしましょうか

「そうか。それじゃ、作戦を説明する」

そう言い、Ｆクラスの勝つ為の作戦が説明されます。

第3問（後書き）

どうも、作者です

亮「どうも、姫路亮です」

今回は亮の嫉妬と成績が少しだけかいま見えたね。

亮「本当に少しだけですけどね」

うぅ……文才ないからってそんなにいじめなくてもいいじゃんか。

亮「ま、それはそれとして……この作品が面白いと感じた人は感想なりポイントなり、どちらでもかまいませんのでしてあげてくださいね。

作者が飛んで喜びますので」

バカテスト　第四問

問．以下の問いに答えなさい。

（１）４ｓｉｎＸ＋３ｃｏｎ３Ｘ＝２の方程式を満たし、かつ第一象限に存在するＸの値を１つ答えなさい

（２）ｓｉｎ（Ａ＋Ｂ）と等しい式を示すのは次のどれか、？～？の中から選びなさい

？　ｓｉｎＡ＋ｃｏｓＢ

？　ｓｉｎＡ－ｃｏｓＢ

？　ｓｉｎＡｃｏｓＢ

？　ｓｉｎＡｃｏｓＢ－ｃｏｓＡｓｉｎＢ

姫路瑞希と吉井真希の答え

『（１）Ｘ＝π／６

（２）？』

教師のコメント」

『そうですね。　角度を『。』ではなく『π』で書いてありますし、完璧です』

土屋康太の答え

『（１）Ｘ＝およそ３』

教師のコメント

『およそをつけてごまかしたい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数は上げられません』

吉井明久の答え
『（２）およそ?』

教師のコメント
『先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです』

姫路亮の答え
『（１）Ｘ＝３０。』

教師のコメント
『惜しいですが、ニアミスです。
象限における角度は『。』ではなく『π』で書いてください』

第４問（前書き）

ヒョウガ様、暮灘雪夜様、ＦＯＯＬ様、レイン様

感想ありがとうございます♪

第４問

真希視点）

「吉井に真希！　木下達がＤクラスの連中と渡り廊下で交戦状態に入ったわよ！」

ポニーテールを揺らしながらアタシ達の方へ美波ちゃんがかけてきました。
あ、もちろん回復試験は受けましたよ？あれ、アキ兄が何か考えていますね。

「ああ、む」

「アキ兄、今はＤクラス戦に集中しませんか？」

アタシがアキ兄の言おうとした言葉の前に先手をうって言う。
間違いなく、アキ兄は胸と言おうとしたのでしょうね。
それを言ったら痛い目にあうというのに。

「さぁ来い！　この負け犬が！」

『て、鉄人！？　嫌だ！　補習室は嫌なんだっ！』

「黙れ！　捕虜は全員この戦闘が終わるまで補習室で特別講義だ！
終戦まで何時間かかるかわからんが、たっぷりと指導してやるからな」

『た、頼む！　見逃してくれ！　あんな拷問耐えきれる気がしない！』

「拷問？　そんなことはしない。　これは立派な教育だ。
補修が終わる頃には趣味が勉強、尊敬するのは二宮金次郎といった理想的な生徒に仕立て上げてやろう」

『お、鬼だ！　誰か、助けてっ――――イヤァァ（バタン、ガチャ）』

さすが、西村先生ですね。

真希視点・えんど）

外では戦いの叫び声などか聞こえてきます。
僕とみぃ姉は今、点数を補充するためにテストを受けています。
なぜかというと、みぃ姉は振り分け試験を休んでしまったため、僕は途中退室をした為に持ち点が０点なのです。
いくら頭が良くても、点数が無ければ戦えないという事です。

「「先生、次のお願いします」」

「貴方達は本当にＦクラスなのですか？」

僕達の問題を解く早さに驚きながら先生はいいます。
ま、僕等の途中退席は一部の人しか知らないから仕方ないのかもしれませんね。

「さて……僕は行きますね」

「亮くん、無理しないでくださいね？」

「はい、みぃ姉」

僕は問題をある程度解くと立ち上がる。
そしたら、心配そうなみぃ姉が僕を見て言った。
僕が笑顔で答えると頭を撫でてくれた、それがなんか照れくさくて走って出て行きました。

真希視点）

「明久、真希、援護に来てくれたんじゃな！」

「秀吉、大丈夫？」

「うむ、戦死は免れておる。　じゃが、点数はかなり厳しいところまで削られてしまったわい」

「召喚獣の様子はどうですか？」

「もうかなりヘロヘロじゃな。　これ以上の戦闘は無理じゃ」

「そっか。　それなら早く戻ってテストを受け直してこないと」

「そうじゃな。　全教科を受けている時間はなさそうじゃが、一、

二教科でも受けてくるとしよう」

そう言うと秀吉君は教室に向かって走って行きました。
その後ろに前線部隊に配置されたクラスメイトが続きますが、出陣した時より人数が少ないですね。　西村先生に補習室へ連行されたんでしょう

「吉井、真希。
試召戦争のルールは覚えている？　その科目の教師がいないと召喚はできないからね！」

「分かってる」

「もちろんです」

美波ちゃんの忠告の通り、テストの点数で勝負する試召戦争には色々なルールや制約があります。
あ、本当はアタシとアキ兄は雄二に隠し戦力だと言われたのですが、説得したら。即ＯＫでしたよ。
え？脅しじゃないのかって？　そんなことしませんよ～。まだ、ね。

「吉井、真希。見て！　五十嵐先生と布施先生よ！
Ｄクラスの奴ら、化学教師を引っ張ってきたわね！」

美波ちゃんの言葉通りですね。
相手は一気に決着をつけにくるようですね。

「島田さん、化学に自信は？」

「全くなし。　６０点台常連よ」

島田が化学に自信がないのは前世の記憶？というのでしょうか。
それが教えてくれてますのでわかってはいますけど。
サバ読みがダメですよ。

「よし、それなら五十嵐先生と布施先生に近づかないよう注意しながら学年主任のところに行こう」

「高橋先生のところね？　了解！」

あたし達は、明兄の指示で戦闘が行われている渡り廊下で目立たないように隅へ移動しています。

真希視点・えんど）

ちょうど、僕が戦場にたどり着くとなんだか明久が危ないような雰囲気でした。

「邪魔者は！　殺します！！」

「明久、危ないです！　試獣召喚（サモン）！」

僕の呼び声に導かれて現れたのは僕に似た姿で格好は『．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．』の『ハセヲ（１ｓｔフォーム）』と同じ服装だった。

『Ｆクラス　姫路亮　化学　２３４点　ＶＳ　Ｄクラス　清水美春　化学　４１』

戦闘の結果は一瞬でした。
僕の召喚獣の歪な剣で切り裂きましたからね。

「そ、そんな！……」

「戦死者は補習だー！！」

呆然としている清水さんに西村先生が現れて言うと肩に担ぎあげて歩き出す。
逃げようとする暇も与えられなかった。

「お、お姉さま！　美春は諦めませんからね！　このまま無事に卒業できると思わないでくださ」

最後まで言えずに補習室に連行される、清水さん。

だが、思い人にそういう言い方はいかがなものか。

「吉井隊長！　横溝がやられた！　これで布施先生側は残り２人だ！」

「五十嵐先生側の通路だが、現在俺一人しかいない！　援軍を頼む」

「藤堂の召喚獣がやられそうだ！　助けてやってくれ！」

想像以上に劣勢ですね。

「布施先生側の人達は召喚獣を防御に専念させて！　五十嵐先生側の人は総合科目の人と木下さんと美奈ちゃんと交代しながら効率良く勝負をするように！　藤堂君は可哀想だけど諦めるんだ！」

『了解！』

皆が明久の指示に従って陣形を組んでいますが、これは明久を隊長として扱ってくれているのでしょうね。

「Ｆクラスめ、明らかに時間稼ぎが目的だ！」

「なにを待っているんだ！？」

敵側もなにかあると睨んでいるようですね。
このまま勝てるといいのですが。

「大変だ！　斥候からＦクラスに世界史の田中が呼び出されたって報告が！」

「せ、世界史の田中だと！？」

「Ｆクラスのやつら、まさか長期戦に持ち込む気か！」

Ｄクラスの偵察部隊に、テストの採点でやってきた田中先生が見つかったようです。
世界史の田中教諭はおっとりした初老の男性で、その採点の甘さに定評があります。
その代わり採点には少々時間がかかるけど、長期戦の場合は田中先生の方が都合がいいんですよね。

「吉井、Ｄクラスは数学の木内を連れ出したみたいよ」
美波ちゃんは一度点数補充に戻って情報を入手してきたみたいですね。
数学の木内先生は厳しいけど、採点の早さは群を抜いています。
どうやら、Ｄクラスはこちらとは対照的に、一気にケリをつける気みたいです。
でも、僕達の作戦のためにはそうそう簡単に突破されるわけにはいかないのですよ。
とにかく前線を長く保つことが僕達の役割の一つなのです。

「須川君！」
「なんだ？」
どうやら、明久はなにか思いついたのか須川君に話かけてますね。
「偽情報を流して欲しいんだ。　時間を稼ぐ為に」
「偽情報？　それは構わないけど。　スグにバレるんじゃないか？
Ｄクラスで前線の指揮をとってる塚本は声が大きいから上手くいってもあっと言う間に混乱を収められてしまうぞ」
須川君の言うとおり、Ｄクラスの塚本君は声が大きいのです。
さっきから指示が聞こえるのはありがたいですが、その分混乱を招きにくいのが現状。

「大丈夫。　対象はＤクラスじゃないから」
「と、言うと？」
「先生達に流すんだよ。　他の場所に向かってくれるように」
「……なるほど。　それは確かに効果的だ」
「でしょう？」
「ああ。　流す偽情報の内容は任せてくれ。　確実に騙してみせよう」
「うん。　よろしく」
「あ、ちょっと待ってください」
イキイキした表情で動こうとした須川君を真希ちゃんが引きとめました。
「なんだ？」
「この紙に書いた指示どうりの情報を流してくださいね？」
「わかりました！」
須川君は真希ちゃんに惚れているようです。
「さて、アキ兄指示を」

「あ、うん。皆、僕らは1対1じゃ勝てないからね！　コンビネーションを重視して！」

爽やか笑顔の真希ちゃんを見て明久は苦笑いを浮かべてましたが、ちゃんと指示をだしてますね。

数分後・・・

「塚本、このままじゃ埒があかない！」

「もう少し待っていろ！　今、数学の船越先生も呼んでいる！」

しばらく拮抗した状態を続けていたら、僕達Ｆクラスにとっては好ましくない会話が聞こえてきました。

数学の船越先生（４５歳・女・独身）を呼んだのは採点目的じゃなくて立会人になってもらう為でしょう。

はっきり言ってこれはまずいですね。

これ以上戦線を拡大されると実力差がよりはっきりと出てしまうでしょう。

やはり、参戦すべきでしょうか？

ピンポンパンポーン！

《連絡致します》

聞き覚えのある声が校内放送から流れだしました。

この声は須川君ですね。職員室より放送室を選びましたか。

《船越先生、船越先生》

しかも呼び出し相手は丁度今話題に上がった船越先生のようです。

《坂本雄二君が体育館裏で待っています》

おや、明久ではなく雄二を生贄にだしましたか。

《生徒と教師の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです》

船越先生は婚期を逃してついに生徒たちに単位を盾に交際を迫るようになったそうです。

ちなみに僕もそういうことがありました。

みぃ姉のおかげでなんとかなりましたけど、あれは怖かったです

「坂本代表……アンタぁ男だよ！」

「ああ。感動したよ。まさかクラスの為にそこまでやってくれるなんて！」

前衛部隊の仲間達が感動しながら言ってますね。

『おい、聞いたか今の放送』

『ああ。　Ｆクラスの連中、本気で勝ちに来てるぞ』

『あんなに確固たる意志を持ってる奴らに勝てるのか……？』

Ｄクラスはいい具合に混乱しているようです

『皆、坂本代表の死を無駄にするな！』

『絶対に勝つぞーっ！』

『隊長、行けますよ！　この勢いで押し返しましょう！』

「ああ！！　雄二の為にも皆、いくぞ！」

『おおーーーっ！』

おやおや、これはこれで戦意がもどってきたようですね。

『須川ぁぁぁぁぁっ！！』

須川君……哀れですね。

止められなかった僕を許してください、雪菜ちゃん。

『……雄二…浮気は許さない』

『雄二、後でじっくり話を聞かせてくださいね』

おや？どこからか怨念のような声と闇魔モードの翔夜の声が聞こえてきました。

☆

「工藤信也、戦死！」

「西村雄一郎、総合残り４０点です！」

「森川が戻ってこない！　やられたか！？」

盛り上がった士気のまま戦うことしばし、残念ながら戦力差の影響が現れはじめてきましたね。
工藤君と森川君が戦死（補習室送り）。
これで、１８人いた明久の部隊は残りわずか5人になってしまいました。　そろそろ限界ですか。

「明久、亮、真希！あと少し持ちこたえろ！」

撤退を考え始めていると、そんな激が飛んできました。
辺りを見回してみると、僕達よりはるか後方に雄二と雪菜ちゃんがいました。
というか、雪菜ちゃんを背負っているのにあんな遠くからでもはっきりと声が届くなんて。

「援軍だ！　合流される前に吉井達を全滅させろ！　面倒な事になるぞ！」

Ｄクラス前線部隊指揮官の塚本君の指示が聞こえます。
合流前に全滅させられたら、明久達は全員補習室行きです

「西村雄一郎、戦死！」

「五十嵐先生、Ｄクラス鈴木が召喚を行います！」

「負けるか！　Ｆクラス田中も行きます」

残り４人。　田中君も捕まりましたか

『化学　Ｄクラス・鈴木一郎　９２点　ＶＳ　６７点　田中明・Ｆクラス』

田中君の召喚獣も刀の餌食です。　これで残り３人ですね。

「どんどん行くぞぉっ！」

『化学　Ｄクラス・鈴木一郎　２５点　ＶＳ　６６点　柴崎攻・Ｆクラス』

『化学　Ｄクラス・笹島圭吾　９９点　ＶＳ　４１点　柴崎攻・Ｆクラス』

鈴木君は撃破できましたが、疲労した柴崎君が笹島君にやられてしまいました。
あ、笹島君が明久に向かってきてます。

「吉井明久！　その首級(くび)もらった！」

「させません！　試獣召喚(サモン)」

と、真希ちゃんが言うと召喚した。デフォルメした姿で格好は天使みたいな格好でした。
ただ、武器は釘バットというものでしたけどね。

「くそ！」

『Ｆクラス　吉井真希　化学　３２０点』

ＶＳ

『Ｄクラス　笹島圭吾　化学　５８点』

これで一撃で笹島君は倒されましたね。
さて、明久は？

「ああっ！　霧島さんのスカートが捲れているっ！」

『何ぃっ！？』

明久……何が本当にしたいんですか？
というか、才色兼備の彼女のファンは多いようですね。Ｆクラスの

男子もそうですが、Ｄクラスの男子とＤクラスの女子まで振り返ってますよ

ガシャァァァァン！

明久は皆さんが後ろを向いている隙に窓を割りました

『な、何だ！？　何事だ！？』

突然の出来事にその場の全員の注意が更に逸れます

「うわっ！　佐川君！　そんなものをどうする気だよ！」

佐川君って誰でしたっけ？
というかいないような気がするんですが。
そう明久が言うと消火器の安全弁を引き抜きました。

プシャァァッ！

「う、うわっ！　何だ！？」

「ぺっぺっ！　こりゃ消火器の粉じゃねぇか！」

「前が見えない！」

「佐川君、キミは何てことを！」

「佐川！　何て卑怯な奴なんだ！」

「そうよ、そうよ！　清々堂々と戦いなさいよ」

バレてないんですか！？実在してないのに！！

明久が消火器を天井のスプリンクラー目掛け、おもいっきりブン投げて命中させると

しゅわぁぁぁぁぁーーー

スプリンクラーの水滴が辺りを舞う粉を落とし始めました

「待たせたな、吉井！　五十嵐先生！　Ｆクラス、近藤吉宗が行きます！」

再びクリアーになった視界で勝負を申し込んだのは……雄二君率いるＦクラス本隊の一人、近藤君

「試獣（サモン）召喚！」

『化学　Ｄクラス・中野健太　４３点　ＶＳ　９１点　近藤吉宗・Ｆクラス』

「くっ！　ここは退くぞ！　全員遅れるな！」

「深追いはするな。　俺達も明久の部隊を回収したら一旦戻るぞ」

「皆さんお疲れさまです！」

雄二は皆に指示を飛ばしていました。
雪菜ちゃんは笑顔でみんなに言うとなんだかほんわかオーラーが流れました。

第４問（後書き）

どうも作者です

亮「主人公の姫路亮です」

なんというか、雄二が哀れだね。

亮「そう書いたのは作者ですよ」

いや、いつも明久ばかりだとつまらないでしょ？
だから、この方が面白いかと思って♪
バカ努力の場合ではそんなことにはならないだろうけどね♪

亮「そうですね。僕の心労は変わりませんけど」

感想と評価を楽しみにしております！！

バカテスト　第五問

問　以下の文章の（　）に正しい言葉を入れなさい。
『光は波であって、　（　）　である』

姫路瑞希と姫路亮の答え
『粒子』

教師のコメント
『よくできました。』

土屋康太の答え
『寄せては返すの』

教師のコメント
『君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。』

吉井明久の答え
『勇者の武器』

教師のコメント
『先生もＲＰＧは好きです。』

吉井真希の答え
『闇と対なる』

教師のコメント
『ファンタジーな問題ではありません。
というよりわざと珍回答をしていませんか？』

坂本雪菜の答え
『光の剣』

教師のコメント
『先生もスレイヤーズは好きです』

第5問（前書き）

ＦＯＯＬ様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます！！

第5問

教室に戻り、化学のテストを受け直した後、

「明久、須川を知らないか？」

「まだ、立てこもってんじゃないかな」

「そうか」

今の雄二は即席ブラックジャック（靴下に砂をいれただけ）とナイフを持っていました。
怨念が深いですね。

「雄二君、そろそろ決着をつけましょう。遊びはその後ですよ」

「そうだな」

真希ちゃんが雄二に言うと持っていたものをしまう。
どこにしまっているのか気になりますね。

「ちらほらと下校しておる生徒の姿も見え始めたし、頃合いじゃろう」

「……（コクコク」

みんな意気込んでいますね。

「雄兄…私も」

「雪菜は俺から離れるな」

「……はい」

過保護ですね～、雪菜ちゃんは大変そうです。

「おっしゃ！　Ｄクラス代表の首級を獲りに行くぞ！」

『おうっ！』

皆で教室を出て行きます。

え、雄二に本当の事を言わないのかって？

面白味がかけますのでこのままにします♪

「下校している連中に上手く溶け込め！　取り囲んで多対１の状況を作るんだ！」

雄二の指令が戦場に響く。

「そっちから、周り込め！　俺はこいつに数学勝負を申し込む！」

「なら、俺は古典勝負を！」

「日本史で……！」

Ｄクラスの連中を囲んで、Ｆクラスのメンバーは倒していく。

そんな中に声があがった。

『Ｄクラス塚本を討ち取ったぞ！』

一際大きな声があがり、ますます士気があがる。

先ほど苦労した塚本君をうまく討ち取ったようだ。
各クラスのＨＲ（ホームルーム）も終わり、先生達が捕まえやすくなったからかもしれませんね。

「援護に来たぞ！　もう大丈夫だ！　皆、落ち着いて取り囲まれないように周囲を見て動け！」

また、よくとおる声が聞こえた。そいつはＤクラス代表の平賀だ。

「Ｄクラス本隊だ、ついに動きだしたぞ！」

と、クラスの誰かが言っていた。
いよいよ、みたいだね。
僕はみぃ姉と先に進みますか。

真希視点）

「いよいよ、正念場だね」

「最強無敵の兄妹チーム結成です！」

アキ兄とアタシがチームを組めばまさに敵なしという状態となっています。

「本隊の半分はＦクラス代表の坂本を狙え！　残りは包囲されている者を救出だ！」

平賀君の号令の下、あっというまに雄二君を中心にたFクラス本体の周りがDクラスメンバーに囲まれてしまいました。

「Fクラス、撤退だ！分散して敵を攪乱しつつ後退するんだ！」

「逃がすな！　個人戦ならそうそう負けはない！　追いつめろ！」

Dクラス代表の声に従い追撃する・・・が、Dクラス本体に隙ができました。

「Fクラスの吉井と」

「Fクラスの吉井真希が近衛隊の４人に総合科目で勝負です」

『え！？』

アキ兄とアタシの作戦は邪魔な部隊を引き受けることなのです。

「試獣召喚！」

『試獣召喚です！』

『『『『し、試獣召喚！！』』』』

お互いの召喚獣が召喚されると頭上に点数が表示されました。

《Fクラス　吉井ツインズ　総合科目　１５００点　ＶＳ　Dクラス　近衛隊Ｘ４人　総合科目　３４６点》

『『『『え！？』』』』

「では、さようなら」

「ごめんね」

アキ兄とアタシは得物（武器）を構えて倒しました。
ちなみにアキ兄は黒学ランで木刀を持っています。
アタシは某アニメに出てくるデスサイズを模した杖をつかう格好した少女と同じ姿です。

《Ｆクラス　吉井ツインズ　総合科目　１５００点　ＶＳ　Ｄクラス　近衛隊Ｘ４人　総合科目　０点》

後は平賀君だけですね。
彼の相手は…彼女と彼に任せましょう。

『頼みましたよ、みーちゃんに亮君』

「頼んだよ、姫路さんに亮」

平賀君の後ろにいるみーちゃんと亮に笑顔で言いました。

真希視点・えんど）

☆

亮視点）

「は、はい」

「了解です」

「え？　あ、姫路さんに亮。どうしたの？　ＡクラスとＢクラスはこの廊下通らなかったと思うけど」

現状が理解できない様子の平賀君、それはそうですよね。
僕とみぃ姉がＦクラスだとは思わないでしょうね。
途中退席のこと教えてませんし。

「Ｆクラスの姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「Ｆクラスの姫路亮です、よろしくお願いします」

「あ、こちらこそ」

「「Ｄクラスの平賀君に現代国語を申し込みます」」

「はぁ……どうも」

「えっと…試獣（サモン）召喚です」

「試獣（サモン）召喚です」

《Ｆクラス　姫路瑞希　現代国語　３３９点　＆　Ｆクラス　姫路亮　現代国語　２３９点》

ＶＳ

《Ｄクラス　平賀源二　現代国語　１２９点》

頭上に点数が表示されます。

さすが、みぃ姉。点数がはんぱないよ。

「え？　あ、あれ？」

戸惑いながらも平賀君も召喚獣を構えさせ、相対してます。
けど、相手にならなそうですね。みぃ姉の召喚獣は強そうですし。
あの剣は背丈をこえてますね。

「ご、ごめんなさい！」

「すいませんね」

その得物に似合わず素早い動きで相手に肉薄する僕とみぃ姉の分身。
相手の反撃の許さずに、一撃でDクラス代表を下して、この戦いの
決着となりました。

≪Dクラス代表・平賀源二　討死≫

『『『『うぉぉーーっ！（あぁぁーーっ！）』』』』

その知らせを聞いたFクラスの勝鬨とDクラスの悲鳴が混じり、耳
をつんざくような大音響が校舎内を駆け巡ります

『凄ぇよ！　本当にDクラスに勝てるなんて！』

『これで畳や卓袱台ともおさらばだな！』

『ああ。　アレはDクラスの連中の物になるからな』

『坂本雄二サマサマだな！』

『やっぱりアイツは凄い奴だったんだな！』

『坂本万歳！』

『姫路さん、愛しています！』

『真希さん、結婚してください！』

代表である雄二を褒め称える声がいたるところから聞こえてきます。
というか、最後の言葉が聞かなかったことにしておきます。

「あー、まぁ。　なんだ。　手放しで褒められると、なんつーか」

頬をポリポリと掻きながら明後日の方向を見る雄二。　照れるなんて意外ですねぇ

『坂本！　握手してくれ！』

『俺も！』

皆さんにとって雄二は英雄みたいです。
この光景を見るだけでどれだけ皆さんが、あの教室に不満を抱いていたのかがわかりますね

「雄二！」

「ん？　明久か」

明久が雄二に握手を求めようとしています。

「おめでとう」

「ああ」

「まさか姫路さんと真希さんと亮がＦクラスだなんて……信じられん」

背中から誰かの声が聞こえてきました。
振り向くとそこにはヨタヨタと歩み寄る平賀君の姿がありました。

「あの、さっきはすみませんでした」

「いや、謝る事はない。　全てはＦクラスを甘く見ていた俺達が悪いんだ」

騙しうちがそんなに嫌なのでしょうか？というか、みぃ姉は悪くないと思いますが。

「ルールに則ってクラスを明け渡そう。　ただ、今日はこんな時間だから、作業は明日で良いか？」

敗者の将ですか……勝てば英雄のように扱われるのが代表なら、負ければ戦犯として扱われるのも代表ですね

「もちろん明日でいいよね、雄二？」

「いや、その必要はない」

雄二君は、予想通りの返事をしました。　明久を見ると驚いてます、わからなくもないですが。
雪菜ちゃんもなぜか不思議そうな表情をしてますね

「え？　何で？」

「Dクラスを奪う気はないからだ」

「雄二、それはどういうこと？　折角、普通の設備を手に入れることができるのに」

「忘れたのか？　俺達の目標はあくまでもAクラスのはずだろう？」

「でもそれなら、何で標的をAクラスにしないのさ。　おかしいじゃないか」

「少しは自分で考えろ。　そんなんだから、お前は近所の中学生に『バカなお兄ちゃん』なんて愛称をつけられるんだ」

「雄二、そんな半端にリアルな嘘をつかないでよ！」
「おっとすまない。　近所の小学生だったか」
「……人違いです」
「まさか……本当に言われたことがあるのか……？」
冗談のつもりでいったのにという顔をする、雄二。
そんなことないと僕は信じたいです
「と、とにかくだな。　Ｄクラスの設備には一切手を出すつもりはない」
「それは俺達にはありがたいが……それでいいのか？」
「もちろん、条件がある」
「一応、聞かせてもらおうか」
「なに。　そんな大したことじゃない。
俺が指示を出したら、窓の外にあるアレを動かなくしてもらいたい。
　それだけだ」
雄二君が指差したのは窓の外に設置されているエアコンの室外機。
この室外機は、ちょっと貧しい普通の高校レベルの設備でしかないＤクラスにエアコンというものはないので、置いてるのはスペースの関係でここに間借りしている……

「Ｂクラスの室外機か」

「設備を壊すんだから、当然教師にある程度睨まれる可能性もあるとおもうが、そう悪い取引じゃないだろう？」

うまく事故に見せかければ厳重注意ですみ、それだけで二ヶ月のもの期間をあの教室で過ごすという状態から逃げられる……決して悪い取引ではないです。

「それはこちらとしては願ってもない提案だが、何故、そんなことを？」

平賀君の疑問はごもっともです。

「次のＢクラス戦の作戦に必要なんでな」

「……そうか。　ではこちらはありがたくその提案を呑ませて貰おう」

「タイミングについては後日詳しく話す。　今日はもう行っていいぞ」

「ああ。　ありがとう。　お前らがＡクラスに勝てるよう願っているぞ」

「ははっ。　無理するなよ。　勝てっこないとおもっているだろ？」

「それはそうだ。　ＡクラスにＦクラスが勝てるわけがない。　ま、

社交辞令だな」

じゃあ、と手を挙げてＤクラス代表、平賀君は去っていきます

「さて、皆！　今日はご苦労だった！　明日は消費した点数の補給を行うから、今日のところは帰ってゆっくりと休んでくれ！　解散！」

平賀君が去ったあと、雄二がこちらを向いて号令をかけると、皆さんは雑談を交えながら自分のクラスへと向かい始めました。

第5問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！！

バカテスト　第六問

数学

問　以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい』

姫路瑞希の答え

『Ｃ６Ｈ６』

教師のコメント

『簡単でしたかね。』

姫路亮の答え

『Ｃ６Ｈ５ＮＯ２』

教師のコメント

『それはニトロベンゼンの化学式です。

名前にベンゼンが含まれている物を指したわけではありません。』

土屋康太の答え

『ベン＋ゼン＝ベンゼン』

教師のコメント

『君は化学をなめていませんか。』

吉井明久の答え
『Ｂ－Ｅ－Ｎ－Ｚ－Ｅ－Ｎ』

教師のコメント
『あとで土屋君と一緒に職員室に来るように。』

吉井真希の答え
『ヘンゼン』

教師のコメント
『君も後で職員室に来るように。』

第6問

「雄二、真希、雪菜ちゃん。　僕らも帰ろうか」

「「「そうですね（だな）」」」

「あ、あのっ」

「ん？」

教室に向かおうとする雄二をみぃ姉が呼びとめます

「みーちゃん、どうしました？」

「実は、坂本君に聞きたいことがあるんです」

胸に手を当てながら興奮気味に話すみぃ姉。
よほど聞きたいことなんだろうな～。

「おう。わかった」

そう応えると、雄二はみぃ姉と一緒に僕と明久と真希ちゃんと雪菜ちゃんから少し離れたところで話し始めました。
ふと明久の顔を見ると、少し寂しそうな顔をしていました

「ま、元々興味があったが、きっかけはコイツはそんな相談をしてきたってコトだ」

そんなことを思っていると、いつの間にか二人がこちらに歩いてきました。

「あの、吉井君がそんなことを言い出した理由って……」

話の内容からすると、どうしてAクラスに試召戦争をしようとしたのかを聞いてるみたいです。

「さて、そう言えば、振り分け試験で何かあったみたいだが、それと関係があるかもしれないな。バカにはバカなりに譲れないものがあった、ってコトだろ？」

僕は知っていたけど、みぃ姉は知らなかったもんね。

明久がこの作戦の発端だということを

「振り分け試験って――――それじゃ、やっぱり」

「俺の口から言って良い範囲はこれが限界だと思うが――――多分、姫路の想像は間違っていないと思うぞ」

そういって、雄二は明久のところへ向かいました。

もう話は終わったのかな？

「みぃ姉、話はすんだ？」

「あ、うん。もう大丈夫よ」

「さて明久に雪菜に真希、そろそろ帰るぞ」

「あ、うん。姫路さんとはもういいの？」

「はい」

「わかりました、雄兄」

「ああ。これで決心も固まっただろうし、な？」

雄二がみぃ姉に問いかけるとボンッと音が聞こえてきそうなくらいにみぃ姉の顔が真っ赤になった。

青春ですね～

「ふーん、そっか。よくわからないけど、それじゃ帰ろうか。姫路さん、亮、またね」

「あ、はい！　さようなら！」

「はい、さようなら」

僕達はそういって、明久たちを見送りました。

「さて、僕達も用事をすませてから帰ろうよ」

「え？」

「ラブレター書くんでしょ？」

「ふわ！？なんでわかるの！！」

僕はみぃ姉を見て言うと面白いくらいに驚いて言った。

双子の神秘と言ってもいいですけど、それじゃ本気にされるのでいわないけどね。

「何年、僕がみぃ姉の双子の弟をしていると思うの」

「あ……そうだったね」

すぐに納得するところもみぃ姉らしいけど。
心配の種がつきないよ

「ほら、行こう？　別に読んだりしないし」

「うん」

そんなやりとりしながら僕達は教室に向かった。

Fクラスの教室内。
僕はみぃ姉を待つ為に自分の席で（席といえるかわからないけど）本を読んでいる。
みぃ姉はさきほどから、どういう内容にしようか悩んでいるようだ。
少しだけ考え事していると教室の扉が開いた。

「たっだいまー」

とまるで我が家に帰ってくるかのように声をかけて、明久が入ってきた。

「よ、吉井くん！？」

「ん？　明久？」
慌てるみぃ姉を見てから僕は明久を見る。
「あれ？　姫路さんに亮？」
「どどどどうしたんですか？」
みぃ姉、慌てすぎ。
まぁ、明久にむけてのラブレターを書いてる最中だから、そうなるのはしかたないかもね。
明久がみぃ姉の卓袱台の上に置いてある便箋と封筒を見ている。
「あ、あの、これはっ」
慌てているけど、なんとか考えて話そうとしているみぃ姉。
でも、明久はなんか違うことを考えてそうだね。
「これはですね、そのっ」
「うんうん。わかってる。　大丈夫だよ」
……明久、何が大丈夫なのか聞きたいんだけど。
「えっと……ふぁっ」
コテン、と卓袱台につまずいて転けるみぃ姉。
その拍子に隠そうとしていた手紙が明久の前に飛んでいった。

「……」

飛んできた手紙を明久は綺麗にたたみ、みぃ姉に返してあげた
そして、みぃ姉を気遣うように

「変わった不幸の手紙だね」

ずこっ！！

「え、亮！大丈夫！？」

「だ、大丈夫です」

おもわぬ明久の発言にこけてしまった僕。
手紙を自分宛だと思っていないみたいだし。

「あ、あの、それはそれで凄く困る勘違いなんですけど……」

みぃ姉がすごく困ってる。

「そんな事しないでも、言ってくれたら僕が直接手を下してあげるのに。
あ！心配はいらないよ、スタンガンなら隣のクラスの山下君に借りてくるから」

なにげに物騒な話になってないか？

「吉井君。これは不幸の手紙じゃないですから」

「嘘だ！　それは不幸の手紙だ！　実際に僕はこんなにも不幸な気分になっているじゃないか！」

子供のように手を振り回している明久。
もう、どうツッコミをいれたらいいのかわからないな。

「吉井君」

みぃ姉が暴れる明久を抑えるために手を握って、

「落ち着いて下さい。そんなに暴れると身体をぶつけて怪我をしちゃいますよ？」

諭すようにそう言った。

「……仕方ない。現実を認めよう……」

がっくりと膝をつく明久。
そこまで落ち込むこともないでしょうに。

「その手紙、相手はウチのクラスの———」

「……はい。クラスメイトです」

顔を真っ赤にして迷いなく答えるみぃ姉。
なにやら明久が勘違いしてるような気がするんだが、

「……そっか。でも、そいつのどこがいいの？　そりゃ確かに、外見はそれなりだとは思うけど」

「あ、それは僕も気になる」
「あ、いえ。外見じゃなくて、あっ、もちろん外見も好きですけど！」
確かに外見は悪くはないしね。
「憎いっ！　あの男が心底憎い！」
あの男って雄二のことか？
「そう、ですか……？」
「うん。外見に自信のない僕には羨ましくて」
「え？　どうしてですか！？　とっても格好良いですよ！　私の友達も結構騒いでいましたし！」
「え？　ホント？」
「はい。よくわからないですけど、坂本君と二人でいる姿を見ては『たくましい坂本君と美少年の吉井君が歩いているのって絵になるよね』ってよく言ってました」
友達ってあの子のことかな。
「良い友達だね。仲良くしてあげてね」
「『やっぱり吉井君が受けなのかな？』とも言ってましたよね」

「前言撤回。その友達とは距離をおこう。姫路さんにはまだちょっと早いと思う」

明久の意見に僕は賛成だ。

距離を置かせるように頑張っているんだけど、天然だからな。

「それにしても、外見もってことは、中身が良いの？」

「あ、えーっと……はい……」

「そうだね。肝臓とか頑丈そうだもんね」

「「それは身体の中身です（でしょう？）」」

何を考えているんだよ。

「じゃ、まさかありえないとは思うけど、そいつの性格が？」

「ありえなくありませんっ」

おおっ、珍しく大きな声だな。

「……そいつの性格のどこがいいの？」

「や、優しいところとか……」

「確かに優しい性格だよな」

「今から番号を教えるから、メモの準備はいい？　大丈夫、とっても腕の良い脳外科医だから」

「……それは僕達の気が変になったとでも？」

「別に気が変になったわけじゃありません！」

結構失礼だぞ。

「ていうか、亮も姫路さんの好きな人を知ってるの？」

「まぁな」

動揺もせずに僕は答える。

「りょ、亮……」

「大丈夫。誰にも言わないから」

「うん、ありがとう。」

僕にみぃ姉は笑顔で言う。

「えっと、その人は優しくて、明るくて、いつも楽しそうで……私の憧れなんです」

その真剣な口調からは、どれだけ明久が好きなのかがわかるくらいに強い想いが感じられた。

「その手紙」

「は、はい」

「良い返事が貰えるといいね」

「はいっ！」

そういって、明久は教科書をカバンにしまって帰った。

それから少ししてから僕達も帰路についた。

「あ、そうだ！　明日のお弁当の材料を買わないと！」

あ、忘れていた！！！

みぃ姉の料理の味見っていつも僕になるんだよね。

父さんと母さんにさせるわけにもいかないけど。

「みぃ姉、明日の弁当さ。僕も手伝うよ、一人だと大変だろ？」

「ありがとう、亮くん♪」

そんな話をして、僕とみぃ姉は買い物をしてから家に帰った。

翌日の朝。

僕は早く起きてみぃ姉と一緒に台所に行った。

多少、耐性がついててもあの料理はキツイから、見張りながら料理しないと。

明久達の命が危うい。

「じゃあ、作ろうか」

「うん！」

さっそく料理を開始。
とにかく、明久達に渡す料理は僕のでみぃ姉のは僕が食べることにしよう。

「ん～　ちょっと酸っぱくしたほうがいいかな？」

隣で味付けを変えようか悩んでいるみぃ姉。

「えっと、酸っぱくするには硫酸だね」

「ちょっ、ちょっと待った！！なんで硫酸なんだよ！」

「え？　だって酸っぱくしたいから……」

「酸っぱくするんだったら酢を入れてよ！というか酸っぱくする必要のない料理だよな、これ！？」

またもや、みぃ姉が殺戮料理を作ろうとしていた。

「できた～！」

「時間はまだ平気だね」

まだ遅刻する時間ではないな。
ちなみにお弁当と一緒に朝ご飯も作ったよ。
僕等の親は朝早くからどこかへと出掛けていて今はいない。

「では、朝ご飯にしましょう」
そういって、作った料理を並べる。
「では、いただきます」
「いただきます」
朝ご飯は普通……だと思っていたら、みぃ姉制の料理になっていた。
迂闊だったぜ。
「りょ、亮。大丈夫！？」
「だ、大丈夫……」
てか、殺戮料理はやめてほしい。
「みぃ姉……いつも僕言ってると思うけど」
「ご、ごめんね？　どうしてもオリジナルがほしくて」
「オリジナルなんかいらないからね！　料理はサイエンスじゃないんだから」
僕はみぃ姉に言うとしゅんと落ち込んだようだ。
何度も言ってるんだけど、わかってくれたかどうかが怪しいんだよね。
この後、僕の作った朝食をみぃ姉に食べさせて、僕はみぃ姉が作った朝食を食べることにした。

「大丈夫か？　亮」

「あ、雄二。大丈夫です」

顔をあげると雄二と心配そうにこちらを見ると雪菜ちゃんがいた。

「なら、いいが。無理するなよ？」

「そうですよ！」

「うん、気をつけますよ」

苦笑いしながら雄二と雪菜ちゃんに言うと安心して離れていった。

その後、僕は卓袱台にもたれた。

ーーー四時間後ーーー

「うあー……づがれだー」

「疲れましたねぇ」

机に突っ伏す明久と真希ちゃん。　今、４教科目が終わりました。

朝から佐川君の件で明久が呼ばれたりで、色々あったもんね

「うむ。　疲れたのう」

秀吉君がいつの間にか近くに来ていました。
今日の髪型はポニーテールですか……本当に男として見られたいのか？（汗）

「……（コクコク）」

ああ、康太君もいたんだ。

「よし、昼飯食いに行くぞ！」

「雄兄……お弁当」

「おっ、サンキューな」

「えへへ♪」

勢いよく立ち上がる雄二からは全然疲れが感じられません。
雄二に雪菜ちゃんがお弁当を渡している。
おそらく、彼女の手作りだろう。

「ん？　吉井達は食堂に行くの？　だったら一緒していい？」

「ああ、島田か。別に構わないぞ」

「それじゃ、混ぜてもらうね」

「……（コクコク）」

「皆、今日はみぃ姉がお弁当を作ってくれたので食べませんか？」

僕はみぃ姉と一緒に近寄って言った。

「弁当か、楽しみじゃのう」

「は、はいっ。　亮くんと一緒に作ったので、迷惑じゃなかったらどうぞっ」

「迷惑なもんか！　ね、雄二！」

「ああ、そうだな。　ありがたい」

「そうですか？　良かったぁ～」

「弁当を作る手伝いをしたかいがありますよ」

僕は苦笑いしながら言う。

真希ちゃんもなんとなく苦笑いしてるように見える。

「むー……っ。　瑞希って、意外と積極的なのね……」

「美波ちゃんも作ればいいじゃないですか」

「そ、それは……まだ、自信がなくて。……亮も料理できるなんて」

島田らしいな。自信を持ってから出したいという気持ちは嫌いではないではないよ。
てか、最後の方はなんでか落ち込んでいた。なんで？
「それでは、せっかくのご馳走じゃし、こんな教室ではなくて屋上でも行くかのう」
「そうですね」
「そうか。　それならお前らは先に行っててくれ」
「ん？　雄二は何所か行くの？」
「飲み物でも買ってくる。　昨日、頑張ってくれた礼もかねてな」
「あ、それならウチと雪菜も行く！　一人じゃ持ち切れないでしょ？」
「悪いな。　それじゃ頼む」
「おっけー」
「うん！」
「きちんと俺たちの分をとっておけよ」
「大丈夫だってば。　あまり遅いとわからないけどね」
「そう遅くはならないはずだ。　じゃ、行ってくる」

雄二君と島田は財布を持って教室を出て行こうとする。

「あ、美波ちゃん。お願いがあります」

「ん？何、真希」

「はい、お茶は多く買っておいてほしいのです」

「へ？なんで？」

「理由は聞かないでください」

「よくわからないけど、わかったわ」

「すみません、頼みましたよ」

「えぇ」

島田を見送ってから僕はみぃ姉達と一緒に屋上に向かいました。

「天気が良くて何よりじゃ」

「そうですねぇ」

屋上へと続く扉の向こうは抜けるような青空だった。

「あ、シートもあるんですよ」

みぃ姉がバックからビニールシートを取り出します。
それから、ワイワイと準備を始めていく。

「気持ち良いですねぇ」

「……（コクリ）」

真希ちゃん達はビニールシートの上に足を投げ出していきます。
それにしても日差しと風が気持ちいいのに、内心では雨な気分だ。

「あの、あんまり自信はないんですけど……」

「「「おおっ！」」」

「凄いですねぇ」

「確かに」

みぃ姉が重箱の蓋をあけると、明久達は一斉に歓声をあげました。
確かに見た目（、、、）は凄く美味しそうなんだよね。

「それじゃ、雄二には悪いけど、先に――――」

「……（ヒョイ）」

「あっ、ずるいぞムッツリーニっ」

康太は素早い動きでエビフライをつまみ、流れるように口に運びました

「……（パク、モグモグ）」

「どう、ですか？」

みぃ姉が心配そうに聞いている。
すると康太が

「……（グッ」

みぃ姉に向けて親指を立てた。
ふぅ……僕が作ったのと交換したからなんとかなったか。

「あ、お口に会いましたか？　良かったですっ」

「じゃ、僕も食べようと♪」

明久も重箱に手を伸ばして食べる。
その間に僕はみぃ姉が作った重箱を処理することにした。
当然、そこで意識が途絶えたけどね。

次に目が覚めた時は、僕はみぃ姉に膝枕されていた。

「あ、目が覚めた？」

「……みぃ姉」

「ダメだよ？　いくら美味しくても大量に食べたら」
「あはは……そうだね」
みぃ姉に苦笑いしながら僕は言う。
すると
「亮、大丈夫？」
「心配したんですよ？」
明久と真希ちゃんがこちらに来て聞いてきた。
彼女達はどうして僕が倒れたかなんてわからないだろうな。
と、ぼんやりしてると明久が紙を渡してきた。
内容は『真希から聞いたよ、姫路さんの料理のこと』
あぁ、なるほど。でも、どうやって知ったんだろう？

第6問（後書き）

感想と評価を楽しみにまってます！！

バカテスト　第七問

問　以下の問いに答えなさい。
『ｇｏｏｄおよびｂａｄの比較級と最上級をそれぞれ書きなさい』

姫路瑞希＆姫路亮＆吉井真希の答え
『ｇｏｏｄ－ｂｅｔｔｅｒ－ｂｅｓｔ
ｂａｄ　－ｗｏｒｓｅ－ｗｏｒｓｔ』

教師のコメント
『その通りです。』

吉井明久の答え
『ｇｏｏｄ－ｇｏｏｄｅｒ－ｇｏｏｄｅｓｔ』

教師のコメント
『まともな間違え方で先生驚いています。
ｇｏｏｄやｂａｄの比較級と最上級は語尾に－ｅｒや－ｅｓｔをつけるだけではダメです。
覚えておきましょう。』

土屋康太の答え
『ｂａｄ－ｂｕｔｔｅｒ－ｂｕｓｔ』

教師のコメント
『悪い』『乳製品』『おっぱい』

坂本雪菜の答え

『ｇｏｏｄ－ｂｅｔｔｅｒ－ｂｅｓｔ』

教師のコメント

『一つはできましたがもう一つは思いつかなかったみたいですね』

第７問（前書き）

レイン様、暮灘雪夜様、ＦＯＯＬ様、ヒョウガ様

感想ありがとうございます！！

第7問

美波「そういえば坂本、次の目標だけど」

雄二「ん？　試召戦争のか？」

楽しい昼食の後、島田は雄二に話しかけていた。
島田の話を引き継ぐように真希ちゃんが雄二を見て

真希「そうですよ。ねぇ、雄二君。相手はBクラスなんですよね？」

「ああ。そうだ」

真希ちゃんの問いに雄二は頷いて答える
そういえば、昨日雄二が言っていましたね。
Dクラスの窓の外に設置されている、Bクラス用エアコン室外機に用があると言ってたっけ。

「どうしてBクラスなの？　目標はAクラスなんでしょう？」

疑問に思ったことを島田さんは雄二に質問していた。
確かに、僕達の目標はAクラスです。
通過点にすぎないBクラスを相手にするのはなんらかの理由があるのでしょうね。

「正直に言おう」

雄二が神妙な面持ちになりました。

「どんな作戦でも、うちの戦力じゃ、Ａクラスには勝てやしない」
雄二は悔しそうに僕らを見て言う。
戦う前から降伏宣言ですか、雄二らしくもないですけど。
とわいえ、理由がわかりますし、無理もないですよね。
文月学園はＡからＦの６クラスから成りますけど、Ａクラスは格が違います。
別次元だと言ってもいいでしょう。
五十人のＡクラス生徒のうち、四十人はまだいいでしょうね。
Ｂクラスよりも少々点数が上の普通の生徒です。
でも、残りの十人がヤバいんです、特に代表をやっている霧島翔子さんと霧島翔夜君。
彼女等の力は想像を絶するほど強いのです。
奇襲が成功して僕等が彼女と彼を一人取り囲んだとしても、恐らくあっさりにと負けてしまうでしょう。
雪菜「それじゃ、私達の最終目標はＢクラスに変更ということですか？　雄兄」
小首をかしげて雪菜ちゃんは雄二に問いかける。
「いいや、そんなことはない。Ａクラスをやる」
ゆるりと首を横に振ると雄二はまっすぐこちらを見て答えた。
明久「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」
明久が雪菜ちゃんの台詞を引き継ぐように間に入りました。
「クラス単位では勝てないと思う。だから、一騎討ちに持ち込むつ

もりだ」

「一騎討ちに？　どうやって？」

なにか考えがあるのか雄二は明久を見て言った。
すると明久は不思議そうな顔をして雄二に聞く

「Bクラスを使う」

ニヤリと笑って雄二は宣言した。
そして、僕等を見て聞いてきた

「試召戦争で下位クラスが負けた場合の設備はどうなるか知っているな？」

「設備のランクを落とされるんでしたね」

雄二の質問に真希ちゃんが答えた。

「……あぁ。つまり、BクラスならCクラスの設備に落とされるわけだ。
では、上位クラスが負けた場合は？」

頷いてから雄二は言うと次の質問をした。
誰にでもわかると思いますけど。

「相手クラスと設備が入れ替えることができるから。
僕らに負けたクラスは最低設備と入れ替えられるわけだね」

「ああ。そのシステムを利用して、交渉する」

明久は考えながら答えて雄二に言うと雄二は頷いて答えた。

「交渉、ですか？」

みぃ姉は不思議そうに小首を傾げて雄二に聞いていた。

亮「Ｂクラスをやったら、設備を入れ替えない代わりにＡクラスへと攻め込むよう交渉するということですよ、みぃ姉」

僕は雄二の思惑がわかるとみぃ姉に笑顔で言う。

するとなるほど～とみぃ姉は納得していた。

「設備を入れ替えたらＦクラスだけど、Ａクラスに負けるだけならＣクラス設備になるだけですもんね」

真希ちゃんは雄二を見て笑顔で言う。

「ああ、まずうまくいくだろう」

「それで、雄兄。それから、どうするんですか？」

頷いて言う雄二を雪菜ちゃんは見て

雪菜ちゃんが雄二に聞いていますね。

「それをネタにＡクラスと交渉する。『Ｂクラスとの勝負直後に攻め込むぞ』といった具合にな」

雄二はニヤリと笑って答える。

確かに、学年で二番手のクラスと戦った後に休む暇なくまた戦争で

す。
これはきついでしょうね。
秀吉「じゃが、それでも問題はあるじゃろう。」
真希「体力としては辛いし面倒だけど、Ａクラスとしては一騎討ちよりも試召戦争の方が確実であるのは確かだしね」
秀吉は悩みながら言うと真希ちゃんも賛同するように言う。
「そうじゃ、それにーー」
秀吉は頷くと話を少しだけ止めて、
「そもそも一騎討ちで勝てるのじゃろうか？
こちらに姫路と亮と真希がいるということは既に知れ渡っていることじゃろう？」
秀吉の疑問はわからなくもないですね。
Ｆクラスが Ｄクラスに勝ったとなると、当然その勝ち方に注目が集まります。
みぃ姉と僕と真希ちゃんの存在はもはや周知の事実でしょう。
そうなると相手もみぃ姉や真希ちゃんに対してなんらかの対策をするでしょうね。
「そうだよね。どうするのさ、雄二」
「そのへんに関しては考えがある。心配するな」
明久の不安とは対照的に雄二は自信満々です。

「とにかくBクラスをやるぞ。細かいことはその後に教えてやる」
「ふーん。ま、考えがあるならいいけど」
雄二は僕等を見ていうと島田は悩みながら言った。
大丈夫でしょう、勝算がなければこんなことしないと思いますし。
真希「あ、雄二君。今回はアタシがBクラスに行って宣戦布告をしてきますよ」
雄二「いや、お前が行ったら」
真希ちゃんの突然の宣言に雄二は困っているみたいですね。
「それに相手は根本恭二ですよ？　なんらかのことを仕掛けてくるにきまってます」
「なんだと！！」
真希ちゃんは笑顔で雄二に言う、すると雄二は驚きながら言った。
根本っていうと卑怯汚いがデフォルトの。
「それなら、Bクラスに対してもなんらかの作戦を練らなければ」
雄二は腕を組んで悩みながら呟いた。
「雄兄」
「大丈夫だ、雪菜は守ってやるからな」

雪菜ちゃんは心配そうに雄二を見て言う。
すると雄二は雪菜ちゃんの頭を優しく撫でて微笑んで言う。
雪菜ちゃんは安心するように微笑んで、それから雄二は真希ちゃんを見て

「わかった、真希に任せる」

真希ちゃんが行くことを許可した。
すると、明久が立ちあがって

「雄二！僕も行くよ」

「なんでだ？」

明久はきっぱりと宣言した、雄二はわかっているがあえて聞いてきた。

「真希は僕の大切な妹なんだから、兄として一緒に行くのは当然だからね！
それに、雄二だって。そう考えるでしょ？」

ニッコリと笑って明久が言うと雄二はふっと笑って答え、真希ちゃんを見て

「ふっ……そうだな。わかった。明久もついて行け、真希はいいよな？」

「もちろん♪」

雄二が聞くと、真希ちゃんは笑顔で言う。

再びテスト続きの午後が終わると真希ちゃんは明久と一緒にBクラスに向かいました。

当然攻撃はされたらしいけど、催眠(ヒュプノ)で幻覚を見せて撤退したらしい。

そして午後のテストも無事終了して放課後です。

真希「雄二君、終わりましたよ」

「ああ、お疲れ様」

雄二に声をかける真希ちゃんが言うと雄二はねぎらいの言葉をかける。

「お疲れ様です、明久君。お怪我はないですか？」

「あ、うん。大丈夫だよ、怪我してないし」

雪菜ちゃんは明久に声をかけて聞いた

明久は照れながら答えた、雄二が見ると黒いオーラを発生してそうだ。

可愛い子から言われたら嬉しいのという気持ちわかりますね。

第7問（後書き）

作者です～

亮「主人公です」

ついにBクラス戦！
というわけで意気込みをどうぞ！

亮「あの屑を潰してもいいですよね？（黒」

あ、あれ？どうして黒くなってらっしゃるの？（汗）

亮「敵対する輩には冷酷だと言いましたよ。僕」

そう書いたね（汗）

亮「ま、今はどうでもいいですけど。続き、頑張って書いてくださいよ」

が、頑張るよ

バカテスト　第八問

問　以下の問いに答えなさい。
『女性は（）を迎えることで第二次性微期になり、特有の体つきになり始める』

姫路瑞希と吉井真希の答え
『初潮』

教師のコメント
『正解です。』

姫路亮の答え
『かけませんっ！！』

教師のコメント
『どこまで純情なんですか！！？』

吉井明久の答え
『明日』

教師のコメント
『随分と急な話ですね。』

土屋康太の答え
『初潮と呼ばれる、生まれて初めての生理。医学用語では、生理の

ことを月経、初潮のことを初径という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が４３ｋｇに達するころに初潮をみるものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均十二歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境、栄養状態などに影響される』

教師のコメント

『詳し過ぎです。』

坂本雪菜の答え

『恋愛』

教師のコメント

『恋は人を変えると言いますが、残念ながら外れです。』

第８問（前書き）

ヒョウガ様、ＦＯＯＬ様、龍夜Ｍｋ２様、暮灘雪夜様

感想ありがとうございます

第8問

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」

教壇に立った雄二が机に手を置いて皆の方を向いている。
今日も午前中がテストで、ついさっき全科目のテストが終わって昼食を取ったところだ。
総合科目勝負だったから、補給テストが結構大変ではあった。

雄二「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は十分か？」

クラスメイト達『おぉーっ！』

雄二、やる気の違いだと思っていいのか？
他の皆は全然気にしてないし！！
一向に下がらないモチベーション。僕らのクラスの唯一の武器だと思っていいのかな。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。
開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない」

『おおーっ！』

雄二の言うコトはもっともだけど。
テンション高すぎな気がするのは僕だけかな？

「そこで、前線部隊は姫路瑞希に指揮を取ってもらう。野郎共、きっちり死んで来い！」

「ゆ、雄兄。その言い方はどうかと思うんですけど」
雪菜ちゃんは苦笑いを浮かべて雄二に話かけている。
僕も同意見だけど、雄二だしな。
「が、頑張ります」
男のノリについていけないみぃ姉が、若干引き気味に一歩前にでる。
『うおおーっ！』
一緒に戦えるとあって、前線部隊の士気は最高潮に達しようとしてる。
とりあえず、今回は廊下での戦闘で勝ちに行くらしい。
ここで負けると話にならないので、戦力もFクラスは五十人中四十人を注ぎ込む。
そこに我が軍最強かつ校内でも二位という強さを持つみぃ姉がいるから、廊下での戦闘は負けることはないだろうけど。なんか心配だな
キーンコーンカーンコーン
昼休み終了のベルが鳴り響く。これでいよいよBクラス戦開始となる。
「よし、行って来い！　目指すはシステムデスクだ！」
雄二の開戦宣言の声を聞いてFクラスの皆が

『サー、イエッサー！』

と軍隊口調で言う。

ノリがいいというかなんというか。

とりあえず、敵を教室に押し込むのが目的なので、勢いが重要となる。

僕等はほぼ全力でＢクラスへと向かう廊下を駆けだした。

今回の主武器は数学。Ｂクラスは比較的文系が多いのと、なぜか長谷川先生は召喚範囲が広いというのが理由だったりする。一気に勝負をかけたい時にはありがたい先生だ。

他にも英語のライティングの山田先生と物理の木村先生もいる。立ち会いの教師を多くして一気に駆け抜ける。

「いたぞ、Ｂクラスだ！」

「高橋先生を連れているぞ！」

正面を見ると向こうからゆっくりとした足取りでＢクラスメンバーが歩いてくる姿があった。

人数は十人程度か、あくまで様子見といったところだろうか。

「生かして帰すなーっ！」

物騒な台詞が皮切りとなり、Ｂクラス戦が始まった。

『Ｂクラス　野中長男　総合　１９４３点　ＶＳ　Ｆクラス　近藤吉宗　総合　７６４点』

『Ｂクラス　金田一祐子　数学　１５９点　ＶＳ　Ｆクラス　武藤啓太　数学　６９点』

『Ｂクラス　里井真由子　物理　１５２点　ＶＳ　Ｆクラス　君島博　物理　７７点』

圧倒的な実力差に第一陣がことごとくやられていく。
止めをさせられる前にフォローしないとやばい。

「僕が行きます」

僕は皆の援護しに向かう。

『Ｂクラス　坂上智也　物理　１６６点　ＶＳ　Ｆクラス　姫路亮　物理　２００点』

大剣をつかって相手の召喚獣を切り裂く。
それによってＢクラスの生徒は撃沈して、西村先生に連れていかれた。
あの、西村先生。なんで段ボールに？

「姫路の双子の弟がいるぞ～！！」

「気をつけろ！」

僕が出たことで更に警戒させたようだ。
まあ、仕方ないよね。

「お、遅れ、まし、た……。ごめ、んな、さい……」

全力疾走についてこれなかったみぃ姉が来た。
みぃ姉はすまなそうに言う。

「来たぞ！　姫路瑞希だ！」

みぃ姉には警戒しているのか目つきが変わった。

真希「みぃちゃん。来たばかりで悪いんだけど……」

真希ちゃんがみぃ姉に話かけている。

「は、はい、行って、きます」

そういってBクラスの人たちのところへ向った。

「長谷川先生、Bクラス岩下律子です。Fクラス姫路瑞希さんに数学勝負を申し込みます！」

「あ、長谷川先生。姫路瑞希です。よろしくお願いします」

「律子、私も手伝う！」

さっそく勝負をいどまれたのか、律義に返事して言う。

一人相手に二人がかりで挑む当たりはかなり警戒しているようだ。

でも、みぃ姉にはかなわないな。

『試獣召喚（サモン）！』

喚声に応えて魔法陣が展開。おなじみの召喚獣が顔を出す。

みぃ姉の方には鎧を着て、背丈の倍くらいある大剣を持ったデフォルメされたみぃ姉が現れた。

みぃ姉相手の召喚獣は剣と槍を構えている。
「あれ？　姫路さんの召喚獣ってアクセサリーなんてしてるんだね？」
「あ、はい。数学は結構解けたので……」
明久がみぃ姉の召喚獣の腕に気づいて問いかけるとみぃ姉は笑顔で答える。
あぁ、そういえば。あの時に結構嬉しそうにいってたな。
みぃ姉の召喚獣は左手首に腕輪をしていた。
もぶ1「そ、それって！？」
もぶ2「私たちで勝てるわけないじゃない！」
瑞希「じゃ、いきますね」
そういって、みぃ姉の召喚獣が左腕を敵の方に向ける。
「ちょっと待ってよ！？」
「律子！　とにかく避けないと！」
二人は大袈裟なくらいに横に跳んだ。
その直後にみぃ姉の召喚獣の腕輪が光を発した。
キュボッ！
「きゃあぁぁーっ！」

「り、律子！」

みぃ姉の召喚獣から光がほとばしり、逃げ遅れた敵の召喚獣の一体が炎に包まれる。

『Ｆクラス　姫路瑞希　数学　４１２点　ＶＳ　Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　数学　１８９点　＆　１５１点　』

腕輪とは、４００点以上の点数を取った人につけられて、それぞれ特殊な能力を使うことができるのだとか。

「ご、ごめんなさい。これも勝負ですのでっ」

律義に謝りながらみぃ姉は大きく避けてバランスを崩した敵に肉薄し、大剣を振り下ろすみぃ姉の召喚獣。相手の武器ごと一刀両断し、決着は一瞬でついた。

「い、岩下＆菊入が戦死したぞ！」

「なっ！　そんな馬鹿な！？」

「姫路瑞希、噂以上に危険な相手だ！」

どうやらＢクラス前線の残り八人の士気を下げられたみたいだ。

「み、皆さん、頑張ってください！」

みぃ姉が指揮官らしくない指示を出したけど

「やったるでぇーっ！」
「姫路さんサイコーッ！」
「真希ちゃんもステキだぜーっ！」
これでも士気がかなり上がった。
「みぃちゃん、とりあえず下がってください」
「あ、はい」
真希ちゃんはみぃ姉に話しかけて言う。
特殊能力は威力の分だけ消耗が激しいという話なのだ。
「中堅部隊と入れ代わりながら後退して、戦死は絶対するな！」
そんな相手からの声がする。
さて、これからどうしたもんかな。

第8問（後書き）

どうも作者と

亮「姫路亮です」

いやー、Bクラス戦は緊張してくるね～

亮「そうですか？結構緊張してる暇もないような気がするんですけど」

そう思うのは亮だけだよ

次回もお楽しみに～

バカテスト　第九問

問　以下の問いに答えなさい。
『人が生きていく上で必要となる五大栄養素を全て書きなさい』

姫路瑞希＆姫路亮＆吉井真希の答え
『脂質　炭水化物　タンパク質　ビタミン　ミネラル』

教師のコメント
『流石は姫路さんに亮君に真希さん。優秀ですね。』

吉井明久の答え
『砂糖　塩　水道水　雨水　湧き水』

教師のコメント
『それで生きていけるのは君だけです。』

土屋康太の答え
『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、さらに十八歳になっても初潮がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント
『保健体育のテストは一時間前に終わりました。』

坂本雪菜の答え

『雄兄、薬、休息、平和、タンパク質』

教師のコメント

『一つだけあっていますけど、貴方ならありえそうですね』

第9問

秀吉「明久、真希、亮。ワシらは教室に戻るぞ」

明久「そうだね。いくら、真希が幻覚を教室にほどこしていても意味ないもんね」

亮「行きましょう」

真希「急ごう！」

秀吉の提案で僕達は教室に戻ることにした。
なんだか、嫌な予感があったから。

雄二「……うわ、こりゃ酷い」

秀吉「まさかこうくるとはのう」

雪菜「卑怯、だよ」

雄二と秀吉と雪菜ちゃんはこの光景を見て絶句しながら言う
幻覚だと分かっていても酷い有様ですね。
穴だらけになった卓袱台とヘシ折られたシャープや消しゴムが見えていますから。

「真希、幻覚を解いてくれる？」

「うん」

明久が真希ちゃんに言うと真希ちゃんは幻覚を解いた。
幻覚を解かれた教室の中はいつもの見慣れた卓袱台と元に戻ったシャープや消しゴムが顕在していた。

「それはそうと、どうして雄二達は教室があんなになっているのに気付かなかったの？」

明久が疑問に思ったことを雄二に聞いていた。

「協定を結びたいという申し出があってな。　調印の為に教室を空にしていた」

「協定じゃと？」

雄二は雪菜ちゃんの頭を撫でてから僕達の質問に答えてくれた。
協定、ですか。

「ああ。　四時までに決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。　その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。　ってな」

「それ、承諾したの？」

「そうだよ」

明久の質問に雪菜ちゃんが頷いて答えてくれた。
どうやら、二人一緒に出て行ったみたいだすね、心配症な雄二はレアな気がするのはなんでだろう？

「でも、体力勝負に持ち込んだ方がウチとしては有利なんじゃない

の？」

「アキ兄、みぃちゃんと雪菜ちゃん以外はそうかもしれないけど。
みぃちゃんにはキツイよ
作戦を亮君とアタシだけで実行するのもキツイはずだよ」

明久に真希ちゃんは苦笑いしながら言う。
そうなんですよね、みぃ姉は体力がそんなにあるわけではないから。
だからといって、僕と真希ちゃんだけで突撃するのも結構キツイものがあるわけで。

あいつ等を教室に押し込んだら今日の戦闘は終了になるだろう。
そうすると、作戦の本番は明日ということになる」

「そうですね。　この調子だと本丸は落とせそうにないですもんね」

「その時はクラス全体の戦闘力よりも姫路、真希と亮の個人の戦闘力の方が重要になる」

僕が今の状況を知りながら雄二に言うと雄二は僕等を見て宣言した。

「だから受けたの？　姫路さんと真希と亮が万全の態勢で勝負できるようにと雪菜ちゃんが戦闘に出ることがないように」

「そういうことだ。　この協定は俺たちにとってかなり都合がよい」

明久が言うと雄二は頷いて答えた。
雪菜ちゃんは俯いていた、自分も戦いたいのかもしれない。
でも、雄二が許可しないんだろうな～。あの様子だと。

「明久、真希、亮。　とりあえずワシらは前線に戻るぞい。　向こうでも何かされているかもしれん」

そう、秀吉が言うと駆け足で教室を出て行った。

「ん。　雄二、後よろしく」

「アキ兄、アタシは雄二君と話しがあるので、先に言ってて」

「？うん、わかったよ」

明久が出て行こうとしてると真希ちゃんが明久に言うと頷いてから明久は背を向けて教室を出て行く。
僕も後を追う為に走って行くことにした。

「なんか色々やってきそうだね」

「そうですね、この程度で終わるとは思えませんから」

「そうじゃな、気を引き締めた方が良さそうじゃ」

僕等は走りながらあの状況を思い出しながら会話していた。
よく息がきれないなーと思った方、気にしたら負けだよ
あ、そろそろ戦場が見えてきましたね。

「では、二人ともくれぐれも用心するんじゃぞ！」

「秀吉もね！」

「はい」

互いに警告し合い、それぞれの部隊に戻ると同時に真希ちゃんも合流した。

「真希、話は済んだの？」

「うん、言いたいことだけを言ったからね」

明久と真希ちゃんが話をしていると

「吉井、真希さん、亮！　戻ってきたか！」

須川君が出迎えてくれた。

「待たせたね！　戦況は？」

「かなりマズいことになっている」

「え！？　どうしてですか！？」

明久が戦況を聞くと須川君が困ったような表情をして言う。

僕はその事態に驚きながら問いかけた。

「島田が人質にとられた」

「なっ！？」

今度は人質か、卑怯な手段の王道とは、よくやるな。

徹底的にぶっ潰したほうがいいかもしれないな。

でも、やりすぎるのはいけないか？

「お陰で相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。　どうする？」
須川君がこれからどうするか聞いていた。
「……そうだね。とりあえず状況を見たいから、前に行こう。アキ兄に亮」
「うん」
「はい」
真希ちゃんが代わりに応えて言うと僕と明久は頷いた。
戦況を見ないとどうすることもできないから、良い判断ではあるよね。
「じゃ行こう。　そこで敵は道を塞いでいる」
須川君はそう言うと前を歩き、僕等は後ろに続く。
明久と真希ちゃんと一緒に僕等の部隊の人垣を抜けると、そこには須川君の言うとおり二人のBクラス生徒と捕えられた島田さん及びその召喚獣の姿があった。
そして、そばには補習担当講師もいる。
「島田さん！」→明久
「島田さん！」→亮
「美波ちゃん！【何してるの？　美波ちゃん】」→真希

「よ、吉井！　真希！　亮！【吉井が瑞希のパンツ見て鼻血が止まらなくなったって……】」

なんだかドラマみたいな光景だな、今の戦況って。

今、真希ちゃんがテレパシーを使って島田さんと会話しているみたいだけど。

モブ１「そこで止まれ！　それ以上近寄るなら、召喚獣にとどめを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ」

島田さんを捕えている敵の一人が僕等を牽制してくる。

これは、数少ないクラスの女子をただ戦死させるのではなく、人質にとって補習室送りをちらつかせてこちらの士気を挫く作戦かもしれないな。

「総員突撃用意ぃーっ！」

真希ちゃんと何か話をしてから、突撃することに決めたのか。

今の戦況では、これが最善かもな。

「隊長それで良いのか！？」

モブ２「ま、待て、吉井！」

明久の言葉を聞いて敵から『ちょっと待った』コールがかかる。

「コイツがどうして俺達に捕まったと思っている？」

「バカだからでしょ？」→真希

「バカだから」→明久

「殺すわよ」→美波

敵からの問いに真希ちゃんと明久はしれっと答えると島田さんは不機嫌そうに言う。

これは話を合わせているな。

真希ちゃんがテレパシーを使っているんだろうな。

「コイツ、吉井が怪我したって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ」

なんと、そんな嘘の情報で部隊から離れたのかよ。

心配なのはわかるけど、今の戦況を考えてからにしなよね。

「美波ちゃん」

「な、何よ」

島田さんを見て真希ちゃんが言うと、島田さんの顔は心なしか赤いまま返事した。

「怪我をしたアキ兄にとどめを刺しに行くなんて、あなたは鬼か！」

「違うわよ！」

真希ちゃんは島田さんに言うと、すぐに否定の声が帰ってきた。

これは、あるいみ遊んでいる？

明久なんか震えているんだけど、なにがあったのさ。
「ウチが吉井の様子を見に行っちゃ悪いっての！？　これでも心配したんだからね！」
「島田さん。　それ、本当？」
島田さんは逆切れするみたいに言うと明久が質問していた。
「そ、そうよ。　悪い？」
すると、ぷいっと顔をそむけながら島田さんは照れながら答えた。
青春してるね～。
「へっ。　やっと分かったか。　それじゃ、大人しく」
敵が安心したように言うと、
「（アキ兄、美波ちゃんは本物だからね）」
「（あ、うん。わかってる、真希）」
「（ですが、島田さんの場合。偽物と勘違いされても仕方ないと思うんですけど）」
「（言わないで亮。）」
真希ちゃんが明久に話す中、僕もくわわって言うと真希ちゃんは遠い目をしながら言う。
いくら島田さんが本物だと分かっていても日頃の行動を見ると明久

を心配する節なんてないことが多いから。
敵をほったらかしにして会話の結果、今は偽物として扱うことにした。もちろん、島田さんにも同意してもらった。

「総員突撃ぃーっ！！」

「どうしてよっ！？」

明久、ノリノリだな。島田もだけど。

「あの島田さんは偽物だ！　変装している敵だぞ！」

「おい待てって！　コイツ本当に本物の島田だって！」

明久がそういうと敵は狼狽しながら言う。

「黙れ！　見破られた作戦にいつまでも固執するなんて見苦しいぞ！」

「だから本当にーー！」

明久がキッパリと言うと敵は慌てながら言った。
ある意味哀れな存在だな、Ｂクラスの敵さん。

『Ｂクラス　鈴木二郎　英語Ｗ　３３点　ＶＳ　Ｆクラス　田中明　英語Ｗ　６５点』

『Ｂクラス　吉田卓夫　英語Ｗ　１８点　ＶＳ　Ｆクラス　須川亮　英語Ｗ　５９点』

死にかけの二人の召喚獣にとどめを刺し、そのまま島田さんを包囲した。

第9問（後書き）

感想と評価を楽しみにしてます！！

バカテスト　第十問

問題
『バルト三国と呼ばれる国名をすべてあげなさい』

姫路瑞希&姫路亮と坂本雪菜の答え
『リトアニア、エストニア、ラトビア』

教師のコメント
その通りです

吉井真希の答え
『シルヴァラント、テセアラ、テレジア』

教師のコメント
先生もテイルズ系は好きです

土屋康太の答え
『アジア、ヨーロッパ、浦安』

教師のコメント
土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え
『香川、徳島、愛媛、高地』

教師のコメント

正解不正解の前に、数が合っていないことに違和感を覚えましょう

第１０問（前書き）

光闇雪様、暮灘雪夜様、リザク様、ヒョウガ様、ＦＯＯＬ様、暁巧様

感想ありがとうございます！

第１０問

「「補習は嫌だ～！！」」

Ｂクラスの生徒達は補習の先生に連れていかれた。
人質なんてことをするからそうなるんだよ。

「包囲中止！、本物の島田さんだから」

明久が皆に言うと包囲は中止になった。
真希ちゃんが美波ちゃんに近寄って何か話をしているけど、何を話しているんだろう？

「うち、休憩してくるわ」

「あ、お疲れ様。島田さん」

島田は立ち上がると明久は近寄って言った。

「吉井もね、じゃ」

島田さんはそう言うと来た道を戻って行った。
それから、しばらく戦って…教室に戻った。

「あ、みなさん。お帰りなさいです」

「ただいま、雪菜ちゃん。試召戦争はどうなってます？」

雪菜ちゃんが笑顔で出迎えてくれたので頬笑みながら言い、気にな

ったことを聞いた。
「今は協定どおり休戦中じゃ。続きは明日になる」
秀吉は僕らを見て質問に答えてくれた。
「なら、戦況は？」
「一応計画通り教室前に攻め込んだ。もっとも、こちらの被害もすくなくないがな」
明久が僕の代わりに聞くと雄二が答えた。
どうやらメモに書かれたものを読みあげているみたいだ。
「ハプニングはあったけど、今のところは順調というわけですね」
「まぁな」
でも、相手はあの根本恭二。何を考えてるかわからないですからね。
「……（トントン）」
「お、ムッツリーニか。　何か変わったことはあったか？」
康太は情報係で、戦闘には参加せずに周囲を警戒していたようだ。
「ん？　Ｃクラスの様子があやしいだと？」
「……（コクリ）」

土屋の話によると、どうやらCクラスが試召戦争の用意を始めているとのこと。
まず、Aクラスではないだろうから
「漁夫の利を狙うつもりか。　いやらしい連中だな」
雄二はため息を吐きながら呟いて言うと真希ちゃんが康太に近寄って
「土屋君、そこに根本はいた？」
「……いた」
何かを確認するかのように聞いていた。
「真希、どういうこと？」
「アキ兄、あたしの予知の力を忘れたの？」
明久は真希ちゃんに近寄って聞いてきた、すると真希ちゃんは苦笑いしながら言い。
「あ、そういえば。そうだったね」
明久も苦笑いを浮かべて言う。
「つまり、真希ちゃんの情報から推測すると根本とCクラス代表の小山さんは付き合っているんですね」
「えぇ、だから……罠の可能性が高いんだよ」

真希ちゃんを見つめて雄二が言うと真希ちゃんは頷いて言う。

「なるほどな」

雄二は真希の情報網に関心していた。

「？？？　どういうこと？」

「つまりにね、アキ兄。漁夫の利を使ってこちらに攻め込むと見せかけてＣクラスに来させて」

「協定を結びに来た時に倒すんですよ、協定違反だというのを盾に」

不思議そうに言う明久に真希ちゃんが説明して、その続きを僕が説明することにした。

「ま、わかった以上。その誘いにわざと乗っていくか」

「あたしも行くよ」

雄二は立ち上がると言い、真希ちゃんは笑顔で楽しそうに言う。

戦闘好きなのかな？

「真希、無理しないでよ？」

「わかってるよ♪、アキ兄」

明久は真希ちゃんに言うと真希ちゃんは笑顔で言い、雄二と一緒に教室を出てＣクラスへと向かった。

「真希ちゃんと雄兄……大丈夫でしょうか」
「大丈夫ですよ、真希ちゃんと雄二は無事に戻ってきます」
不安そうに言う雪菜ちゃんを励まし。
「そう、ですよね」
「みんなで待ってようよ」
雪菜ちゃんは笑顔で言うと明久は笑顔で言った。
しばらくして雄二達が戻ってきた。
「あ、お帰り。雄二に真希」
「Cクラスはどうでした？」
「真希の予想どおりだった」
明久と僕が雄二に話しかけると雄二はふっと笑って答えた。
つまり、真希ちゃんの情報通りなわけだね。
「こうなった以上、Cクラスも敵だ。　同盟戦がない以上は連戦という形になるだろうが、正直Bクラス戦の直後にすぐCクラス戦はきつい」
向こうもそれが狙いなのだろうけど、こちらが勝ったとしても休憩する暇も与えないだろうし。
「それならどうしようか？　このままじゃ、勝ってもCクラスの餌

食だよ？」

「そうじゃな……」

明久は悩みながら言うと秀吉も悩みながら呟いた。

「なに、心配するな。」

野性味たっぷりの活き活きとした顔で雄二は告げる。

「向こうがそう来るなら、こっちだって考えがある」

「考えですか？」

雄二の台詞に僕は思わず聞き返していた。

「ああ。　明日の朝に実行する。　目には目を、だ」

この日はこれで解散となり、続きは翌日へと持ち越しとなった。

第１０問（後書き）

鏡合わせという新作を書きました☆

ありすと亮と綾菜と真希と翔夜と雪菜が大暴れします！！

良かったら読んでくださいね☆

バカテスト　第十一問

問い　以下の問いに答えなさい。
『マザーグースの歌の中で「スパイスと素敵なもので出来ている」と表現されてるのは何でしょう』

姫路瑞希と姫路亮の答え
『女の子』

教師のコメント
正解です。さすがですね、姫路さんに亮くん。女の子の材料は砂糖とスパイスと素敵なもので、男の子の材料はカエルとカタツムリと仔犬の尻尾と歌われています。

吉井明久の答え
『カレーライス』

教師のコメント
女の子は食べ物ではありません。

吉井真希の答え
『オムライス』

教師のコメント
どのような意図でこの解答を書いたのか非常に気になります。

第１１問（前書き）

ヒョウガ様、光闇雪様、ＦＯＯＬ様

感想ありがとうございます！！

第１１問

「昨日言っていた作戦を実行する」

翌朝登校したら、雄二は開口一番にそう告げた。

「作戦？　でも開戦時刻はまだだよ？」

今の時刻は午前八時半。開戦時刻は九時となっている。

「アキ兄、Ｂクラス相手ではなく、Ｃクラス相手ということだよ」

「あ、なるほど。それで何をすんの？」

真希ちゃんは笑顔で明久に説明していた。

それで明久は納得すると雄二に問いかける

「秀吉にコイツを着てもらう」

そう言って雄二が鞄から取り出したのはうちの女子の制服。

赤と黒を基調したブレザータイプで、他校にもオトナのオトモダチにもかなり人気がある垂涎の一品らしい。

ところで、雄二。その女子の制服はまさか……雪菜ちゃんのでは？

「それは別に構わんが、ワシが女装してどうするんじゃ？」

「いや、そこは男として大いに構った方がいいですよ。秀吉！」

僕は思わずツッコミを秀吉にいれていた。

明久はナイスツッコミというジェスチャーをしていた。
「秀吉には木下優子として、Ａクラスの使者を装ってもらう」
「スルーですか！！？」
雄二はなにもなかったかのように話を進めていく、そこには僕はショックを受けながら叫んだ。
秀吉にはＡクラスに三つ子の姉がいる。
容姿がかなり似ていて、違う箇所なんでテストの点数と喋り方くらいなのだ。
「というわけで秀吉。用意してくれ」
「う、うむ……」
雄二から制服を受け取って秀吉は、その場で生着替えをはじめた。
「後、真希。お前は翔子として秀吉と共に向かってくれ」
「了解だよ～」
真希ちゃんは笑顔で言うと催眠（ヒュプノ）をつかって翔子さんに変化した。
ここまで、できる真希ちゃんはやはり凄いと思う。
「よし、着替え終わったぞい。ん？　皆どうした？」
「さあな？　俺にもよくわからん」
どうやら、秀吉は着替えが終わったようだ。

不思議そうに言う秀吉に雄二はしれっと答えた。

「おかしな連中じゃのう……ん？……Aクラス代表がなんでここにいるのじゃ？」

「あたしですよ、秀吉君」

「む？　真希なのか？　ここまで似てるとは驚きなのじゃ」

秀吉が呟くと真希ちゃんを見て言い、真希ちゃんが笑顔で言った。声真似も得意みたいだね。

「んじゃ、Cクラスに行くぞ」

「うむ」

「えぇ」

雄二が秀吉と真希ちゃんを連れて出て行くと

「あ、僕も行くよ」

「では、僕も」

「わたしも！」

明久が追いかけたので僕も雪菜ちゃんと一緒に行くことにした。

そのまましばらく歩いてCクラスを目の前にして立ち止まる。

＊＊＊＊＊＊

「さて、ここからは済まないが二人だけで頼むぞ、秀吉、真希」

「気が進まんのう……」

「了解だよ」

あんまり乗り気でない秀吉と苦笑いしながら真希ちゃんは言う。
そりゃ、そうだよね。秀吉は姉のふりをして騙すわけだし、真希ちゃんは翔子さんと仲がいいわけだから。

「そこをなんとか頼む」

「むぅ……。仕方ないのう……」

「はぁ、わかったよ」

雄二に頼まれて渋々、真希ちゃんと秀吉は了承した。
謝るときは手伝いにいこうかな。

「悪いな。とにかくあいつらを挑発して、Ａクラスに敵意を抱くように仕向けてくれ。
お前等ならできる」

秀吉は演劇部のホープで、演技が達者だったりする。真希ちゃんは声真似や、人のマネが結構得意だから、適任ではあるんだよな。

「はぁ……。あんまり期待はせんでくれよ……」

「行ってきます」

ため息とともに力なくCクラスに向かう、秀吉と真希ちゃん。
本当に気が重そうだよ。

「雄二。秀吉と真希は大丈夫なの？」

「そうですよ、雄兄。もっと別の方法を考えた方が」

「多分大丈夫だろう」

明久が雄二に言うと雪菜ちゃんも心配そうに言うと雄二は平然と答えた
心もとない台詞はやめてほしいもんですね。

「心配です」

「シッ。秀吉と真希が教室に入るぞ」

雪菜ちゃんが呟くと雄二は口に指を当てて言った。
ここからは聞こえないだろうけど、一応指示にはしたがぅておこう。

ガラガラガラガラ、と秀吉がCクラスの扉を開ける音が聞こえてきた。

『静かになさい、この薄汚い豚ども！』

『……優子、いきなりそれはどうかと思う』

えー！！その言い方はどうかと思うと僕は思っていたのはいうまで

もないよ。

『な、何よアンタ達！』

多分Ｃクラスの代表の小山さんだろう。

入ってきていきなり豚呼ばわりなのだから怒るのは当然だろう。

『話しかけないで！　豚臭いわ！』

『……優子。話しかけたのはこっちなんだからそれは変……』

自分から来た癖にその言い方は、もうツッコミどころが多いんだけど。

『アンタ達、Ａクラスの木下に霧島さんね？

ちょっと点数良いからっていい気になってるんじゃないわよ！

何の用よ！』

『私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！

貴女達なんて豚小屋で充分だわ！』

『なっ！　言うに事欠いて私達にはＦクラスがお似合いですって！？』

『……小山さん、Ｆクラスは豚小屋ほど酷くない』

というか、小山さんにとってＦクラスは豚小屋なんですか？。

それ以前にＦクラスとは言っていないし。

『手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、特別に今回は貴女達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの』

優子さんって本当のこんな性格なのが気になってきた。

『ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。

近いうちに私達が薄汚い貴女達を始末してあげるから！』

『……すみませんでした』

秀吉が先に出ると真希ちゃんは謝って言い、一緒にCクラスの教室から出て行った。

「これで良かったかのう？」

なんだか、すっきりツヤツヤした秀吉が笑顔で聞いてきた。

どんな苦労してたんだと言いたくなるほどだよ。

『Fクラスなんて相手にしてられないわ！　Aクラス戦の準備を始めるわよ！』

Cクラスからヒステリックな小山さんの声が響いた。

挑発に乗りすぎな気もするけど。

「作戦もうまくいったことだし、俺達もBクラス戦の準備を始めるぞ」

「あ、うん」

余計なことに気を取られている暇はない。
あと、十分で今日の試召戦争が始まるのだから。

＊＊＊＊＊

「ドアと壁をうまく使ってね！　戦線を拡大させないで！」

僕は皆に指示する声が飛ぶ。
あの後午前九時よりＢクラス戦が開始され、昨日中断されていたＢクラス戦という位置から進軍を開始した。
雄二曰く、『敵を教室内に閉じ込めろ』とのことだった。
そんなわけで指示を遂行しようとしているのだけど、みぃ姉の様子がおかしい。
本来は総司令官のみぃ姉だけど、今日は一向に指示を出す気配がない。
それどころか何も参加しないようにしているようにも見える。
何かあったのだろうか。

「勝負は極力単教科で挑むのじゃ！」

「補給も念入りに行ってよ！」

そんなわけで今指揮をとっているのは総副司令官の真希ちゃんと秀吉。
ここ数時間は雄二の指示通りうまくやれている。

「左側出入り口、押し戻されています！」

「古典の戦力が足りない！　援軍を頼む」

押し戻されたのは左の出入り口にいるのは古典の竹中先生。
Ｂクラスは文系が多いから、強力な個人戦力で流れを変えないと、一気に突破されてしまう。

「行きます！」

僕は左の出入り口に向かって援護しに行った。

「他に古典の点数が残っている人は左側の出入り口へ！　消耗した人は補給に回って！」

明久の指示も飛ぶ。
ある程度、相手を押し返すと僕は戻ってみぃ姉に近寄った。

「みぃ姉、どうかしたの？」

みぃ姉に声をかける。なんだかわからないけど様子がおかしい。
この原因をはっきりさせないと意味がない。

「そ、その、なんでもないよ」

プルプルと大きく首を振るみぃ姉。長い髪がその動きに合わせて左右に広がる。
あまりにも大きな動きで何かあるのかわかりやすかった。

「そうは見えないよ。何かあったのなら話してくれないかな。それ次第で作戦も大きく変わるし」

「ほ、本当になんでもないの！」

泣きそうな顔されたら、いくらなんでも何かあると思うでしょ。

「右側出入り口、教科が現国に変更されました！」

「数学教師はどうした！」

「Ｂクラス内に拉致された模様！」

右側までもＢクラスの得意とする文系科目に切り替えられるなんて。

「私が行きますっ！」

そう言ってみぃ姉が戦線に加わろうそ駆けだした。でも

「あ……」

急にその動きを止めてうつむいてしまった。

なんだろう。何かを見て動けなくなったようだけど。

みぃ姉が見ていた方を目で追ってみる。

その先には窓際で腕を組んでこちらを見下ろす卑怯者……根本の姿があった。

根本がどうかしたのだろうか？

ここからは見えにくいけど、目を凝らして観察してみた。

そしたら

「っ！！」

そこで僕は見た。彼が手にしている物を。

彼が手にしていた物、それは……三日前の放課後一緒に教室で残っ

ていた時にみぃ姉が書いていたもの、あの封筒だった。
「……なるほどね。そういうことか」
「明久……僕」
明久も気づいたのか、僕の隣で呟いた。
ああ、僕は今の怒りを制限できそうもないよ。
「みぃ姉」
「な、何……？」
僕は怒りをみぃ姉の前では見せないようにしながら話しかける。
「具合が悪そうだから、あまり戦線に加わらないように。」
「そうだよ、試召戦争はこれで終わりじゃないんだから、体調管理には気をつけてもらわないと」
僕と明久はみぃ姉に穏やかな声で言った。
「…うん」
「じゃ、僕と亮は用があるから」
「それじゃあね」
「あ……！」

僕と明久はみぃ姉の返事を聞いてから歩き出した。
みぃ姉の何かいいたげな声が聞こえたけど、気にせず。僕は……オレは駆けだす。
大事な用ができたからな。

「面白いことしてくれるじゃないか、根元君」

「明久から、皮肉が聞けるなんてな……協力してくれるよな？」

「もちろんだよ、亮にとって大切なお姉さんの為でもあるからね」

オレと明久はニッと笑って、拳を差し出すと、明久もそれに合わせ拳を差し出し、打ち合う。

そして

「「あの野郎、ブチ殺す！」」

バカテスト　第十二問

問題
『ＰＫＯとは何か、説明しなさい』

姫路瑞希と姫路亮の答え
『Ｐｅａｃｅ-Ｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓ（平和維持活動）の略。国連の韓国のもとに、加盟各国によって行われる平和維持活動の事。

教師のコメント
そうですね。豆知識ですが、Ｕｎｉｔｅｄ　Ｎａｔｉｏｎｓ　Ｐｅａｃｅｋｅｅｐｉｎｇ　Ｏｐｅｒｅｔｉｏｎｓとも呼ばれたりします。余裕があれば、覚えておくといいでしょう

吉井真希の答え
『ＰＫ』

教師のコメント
それはプレイヤーキラーの略では

土屋康太の答え
『Ｐａｎｔｓ　Ｋｏｓｈｉ－ｔｓｕｋｉ　Ｏｐｐａｉの略。世界中のスリーサイズを規定する下着メーカー団体の事』

教師のコメント
君は世界の平和をなんだと思っているのですか。

吉井明久の答え
『パウエル、金本、岡田の略』

教師のコメント
それはセ界の平和を守る人たちです。

第１２問（前書き）

光闇雪様、ヒョウガ様、ＦＯＯＬ様

感想ありがとうございます♪

第１２問

「雄二！」

「うん？　明久に亮か。回復試験ならさっさと席に着け」

教室に飛び込むと、雄二はノートに何かを書き込んでいるところだった。
しかも、雪菜ちゃんに膝枕したままだというのが凄いけど。
近づいてみるとそれが僕らと敵の現在の戦力を記したものだとわかる。

「話がある」

「……とりあえず、聞こうか」

雄二は書いていた手を止めてこちらを向いた。
表情はいぶかしげだが、今はそんなこと気にしてる場合ではない。

「根本君の着ている制服が欲しいんだ」

「……お前に何があったんだ？」

「明久、それじゃあただの変態だ。つまりだな、雄二。あの屑に面白い罰を思いついたんだ。
その為に屑の服を焼却する必要がある」

明久がとっぴょうしもないこと言うので雄二は呆れていたが、オレ

は明久に言い。
雄二を見て邪悪な笑みで言った。
みぃ姉の大切な物に手を出すヤツは”敵”だ。
だから、覚悟してろよ？

「面白い罰？　……どんなだ？」

オレは興味をもった雄二に内緒話をするためにひそひそと話す。
すると、雄二はニヤリと笑って頷いた。

「よし、良いだろう。良い余興になりそうだ。」

「そうか、なら……みぃ姉を一時戦闘から外してもらいたい」

雄二はオレを見て言うとオレはまっすぐ見つめて言った。
わざわざ、戻ったのはその為なのだからな。
なぜか、雄二はそれを聞くとため息をついてオレを見て言った。

「真希が言っていたのはこのことか。……理由は言えないんだろ？」

「なんだ、先手を打たれていたのか。あぁ、詳しくは言えない」

やれやれと肩をすくめて雄二は言うと真剣な目でオレを見て問いかけた。
オレは頷いて答えた。

「……条件がある」

「何だ？」

「明久、亮、お前達が姫路の担う予定だった役割を果たせ。どうやっても良いから、必ず成功させろ」

オレと明久は互いに顔を向け合い、頷き合った。

「わかった。絶対に成功させて見せる！」

「オレもだ。その役割はなんだ？」

「良い返事だ。仕事は簡単だ、根本に攻撃をしかけろ。科目はなんでもいい」

「皆のフォローは？」

「ない。しかもBクラスの出入り口は今の状態のままだ」

これは厄介だ。

今の戦闘はBクラス前後の扉の二ケ所で行われており、場所の状況から常に一対一となっている。

これは少しでも時間を稼ぐためと、雄二の作戦に必要な行動らしい。

そんな中で教室の奥を陣取っている根本（クズ）に近づく為には圧倒的な個人の火力が必要となる。

一つだけないこともないが、明久にはキツイかもしれない。

「明久、頼みがある。お前には痛い思いをさせるかもしれないが」

「亮！僕と亮は親友で相棒なんだから、大丈夫だよ」

オレは明久を見て言うと明久は真剣な目でオレを見てきっぱりと言

った。
ふっ…そうこなくてはな。
「それじゃ、うまくやれよ」
オレと明久を見て言うと雄二は言うと立ちあがって教室を出ようとする。
「どこか行くのか？」
「Dクラスに指示をだしてくる。礼の件でな、雪菜。行くぞ」
Dクラス。多分室外機の件のことだろう。
雄二はそのまま出て行ったが、雪菜ちゃんは立ち止まって明久を見て
「明久君。貴方はCクラスレベルの学力があるんだから、大丈夫ですよ。
それに、亮くんの相棒である貴方にしかない秀でているものがあるはずです」
ニッコリと笑って雪菜ちゃんは言うと雄二を追いかけた。
「明久、大丈夫か？」
「うん、覚悟はできてるよ」
オレが心配そうに聞くと明久は笑顔で言った。
それに安心するとオレ達は作戦に移すことにした。
明久は島田達の元へ、俺は康太を捜しに向かった。

＊＊＊＊＊＊

そして、作戦開始まで、あと三分の時

オレと康太は屋上で待機していた。

『お前らいい加減諦めろよな。昨日から教室の出入り口に人が集まりやがって、暑苦しいことこの上ないっての』

遠くから根本（クズ）の声が聞こえてきた。

『どうした？　軟弱なBクラス代表サマは、そろそろギブアップか？』

『はァ？　ギブアップするのはそっちだろ？』

雄二の皮肉にめざとく反応する根本。

お前にはかつてないほどの痛みを感じてもらう。

『無用な心配だな』

『そうか？　頼みの姫路さんも調子が悪そうだぜ？』

みぃ姉の純粋な想いを人質にするヤツは許さない。

『……お前等相手じゃ、役不足だからな。休ませておくさ』

『けっ！　口だけは達者だな。負け組代表さんよぉ』

『負け組？　それがＦクラスのことなら、もうすぐお前が負け組代表だな』

雄二は煽るのが上手いな。

さて、明久は大丈夫だろうか？

『けっ。言ってろ。どうせもうすぐ決着だ。お前等、一気に押し出せ！』

『……体勢を立て直す！　いったん下がるぞ！』

『どうした、散々フカしておきながら逃げるのか！』

いよいよ、か。

後は、明久を待つだけ。

「だぁぁあぁぁあっっしゃあああああああ！！！」

ドゴォっ！！！！

「ンなっ！」

ナイスだ。明久、お前の力を信じていたぜ。

雄二の陽動で向こうの主戦力は出払っている今がチャンスだ。

「くたばれ、根本恭二ィーー！」

明久をはじめ、島田達Ｆクラス遊撃隊は根元を打ち取るべく、駆け出す。

だが近衛部隊に阻まれ、足をとめた。
「は、ははっ！　驚かせやがって！　残念だったな！　お前らの奇襲は失敗だ！」
確かに明久達の奇襲は失敗だ。
だが、オレ達のことを忘れているぜ？
＊＊＊＊＊
ダンっ！　ダンっ！　ダンっ！
エアコンが停止した故に、涼を求める為に開け放たれた窓。
屋上より、ロープを使ってオレと康太と先生が飛び込み、根本の前に降り立つ。
「よお、根本君。お前の相手はオレだぜ？」
「き、キサマ……！」
オレが邪悪な笑みで言うと根本は怯えていた。
ふん、今更しまったって顔しても無駄だぜ？
「Ｆクラス　姫路亮。Ｂクラス　根本恭二に物理勝負を申し込む」
『Ｆクラス　姫路亮　物理４４１点』
ＶＳ
『Ｂクラス　根本恭二　物理１８９点』

丸裸となった根本には、もはや逃げ場などない。

「試獣召喚（サモン）！」

現れたのはオレの召喚獣と根本の召喚獣。
オレのは『．ｈａｃｋ／／Ｇ．Ｕ．』の『ハセヲ（２ｎｄフォーム）』だ。
双剣で根本の召喚獣を切り裂いたのと同時に根本に痛みが奔った。

「ぎゃあぁぁぁっ！！　なんで、痛いんだぁ！！」

真っ二つに切り裂かれた根本の召喚獣の痛みがフィードバックされたのか、転げまわっていた。

「オレの召喚獣はな、４００点を超えると相手に観察処分者と同等の痛みを与えることができるんだ。　ま、聞こえてねーかもしれねーけどな」

オレは根本を見て、ククッと笑って言った。
そう、あまりの痛みに根本は気絶してしまったようだ。
今ここに、Ｂクラス戦は終了した。

第１２問（後書き）

感想と評価をお待ちしております

亮

「あー、少しはスッとしたかな」

少しだけなの！！？

亮

「当たり前だろ？」

何言ってんの？って顔された！！！？

バカテスト　第十三問

以下の文章の（　　）に入る正しい物質を答えなさい。
『ハーバー法と呼ばれる方法にてアンモニアを生成する場合、用いられる材料は塩化アンモニウムと（　　）である』

姫路瑞樹&姫路亮の答え
『水酸化カルシウム』

教師のコメント
正解です。アンモニアを生成するハーバー法は工業的にも重要な内容なので、確実に覚えておいてください。

土屋康太の答え
『塩化吸収剤』

教師のコメント
勝手に便利な物質を作らないように。

吉井真希の答え
『酸化カルシウム』

教師のコメント

真面目に答えようとしてくれたことに驚きです

吉井明久の答え
『アンモニア』

教師のコメント
それは反則です。

第１３問（前書き）

ヒョウガ様、光闇雪様、ＦＯＯＬ様

ありがとうございます！！

第１３問

「さて、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といくか。な、負け組代表？」

「随分静かだな」

「……」

そう言うと雄二とオレの視線は床に座り込んでいる根本に向かった。今の根本はさっきまでの強気が嘘のようにおとなしい。

「本来なら設備を開け渡してもらい、お前等には素敵な卓袱台をプレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない」

そんな雄二の発言に、ざわざわと周囲の皆が騒ぎ始める。

「皆、落ち着いてください。わたし達も目標はあくまでもＡクラスなんです。ここがゴールではありません」

雪菜ちゃんはＦクラスの皆を見てきっぱりと言う。

「ここはあくまで通過点にすぎない。だから、Ｂクラスが条件を飲めば解放してやるんだ」

雄二の発言に続くようにしてオレもクラスメイトの皆を見て言った。

その言葉でうちのクラスの皆はどこか納得したような表情になった。

「……条件はなんだ」

力なく根本が問いかける。

「条件？　それはお前だよ、負け組代表さん」

「俺、だと？」

「ああ。お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな」

凄い言い様だけど、そうやって言われるだけのことを彼はやっている。

だからこそ周りの人間は誰もフォローしない。本人もそれは分かっているみたいだ。

「そこで、お前等Ｂクラスに特別チャンスだ」

昨日雄二が言っていた、あの取引の材料を提案する。

「Ａクラスに行って、試召戦争の準備ができていると宣言して来い。そうすれば今回は設備については見逃してやってもいい。」

本当は八つ裂きにしてやりたいけど、ここは我慢しないとな。

「ただし、宣戦布告はしたらダメだよ。すると戦争は避けられないからね。

あくまでも戦争の意思と準備があるとだけ伝えるんだよ？」

「……それだけでいいのか？」

疑うような根本の視線。当初の計画ではそれだけで良かったんだが。

「ああ。Ｂクラスがコレを着て先程言った通りの行動をしてくれたら、見逃そう」

雄二は言うと後ろを向いた。

オレも後ろを向いて夏美さんを見る。

戦後対談と撮影会に参加すると雄二から聞いていなかったら、オレもこの状況には驚いたかもな。

「根本君にはこれを着てもらうよ」

と笑顔で夏美さんが言って取り出したのはシスターの衣装だった。

他にあるのは、巫女、くノ一、ウェディングドレス、魔女っ娘、バニーガール、ネコミミスクミズ、セーラー服、レースクイーンの衣装だった。

「ば、バカな事を言うな！　この俺が、そんなふざけた事を！」

根本が慌てふためく。今、思ったんだが…サイズ合うのか？

「大丈夫、可愛くしてあげるし。サイズもピッタリよ」

夏美さんはニコニコと笑って言う。

この人だけは怒らせない方がいいんじゃないだろうか。

『Ｂクラス生徒全員で、必ず実行させよう！』

『任せて！　必ずやらせるから！』

『それだけで教室を守れるなら、やらない手はないな！』

Bクラスの仲間達からの温かい声援。

これを見るだけで根本が今までどういった行動をとってきたか分かる気がする。

「んじゃ、決定だな」

「くっ！　よ、よるな変態ぐふぅっ！！」

と雄二が言うとBクラスの生徒が根本の腹に拳を叩きこんだ。

うわ～、白目むいてんぞ。

「とりあえず黙らせました」

「お、おう。ありがとう」

びしっと敬礼するBクラス生徒に雄二はたじたじだった。

「じゃ、さっそく。着せ替えしましょうか」

夏美さんはそれはもう素敵な笑顔で言うと根本の制服を脱がす。

哀れ根本、キミは雄二みたいな素敵な美少女へと生まれ変わるんだな。

「あ、亮くん。はい」

「あ、どうも」
夏美さんに呼ばれて根本の制服を受け取るとポケットからみぃ姉のラブレターを回収した。
「亮、その制服。どうするの？」
「とりあえず、夏美さんに預かってもらっとくよ」
明久がオレに近寄って聞いてきたのでオレは夏美さんを見てから明久を見て答えた。
その方が、いいだろうしな。
「夏美さん、手伝いますよ」
真希ちゃんはウキウキしながら夏美さんの手伝いをしていたのは見なかったことにしておこうと思った。明久から、手紙を返してもらった方がいいよな。
「明久」
「亮が返してあげなよ？」
オレが明久に声をかけると明久は笑顔で言った。
なんでさ
「いや、ここは明久が」
「僕、西村先生に叱られてこないといけないからだよ。お願い！」

なんとしても明久に行かせようとするともっともな理論が返ってきたのだから、なんともいえない。
なので、俺はみぃ姉の鞄に手紙を戻しに戻ることにした。
明久は職員室に向かったけどな。
こってりと絞られるんだろうけど、頑張れよ。

「さて、みぃ姉の鞄にっと」

「亮」

鞄に手紙を戻していると涙目なみぃ姉がいた。
あれ、いつ戻ってきたんだろうか？

「取り戻してくれたんだね」

「みぃ姉の大切な手紙だからね」

オレを見てみぃ姉は言うとオレは戸惑いながらも答えた。

「ありがとう、亮」

「うわっ！？」

みぃ姉はとても嬉しそうにオレを抱きしめた。
ここでオレから僕に戻ったのはいうまでもない。
幼い頃からみぃ姉はいつもこうやって僕を落ち着かせてくれる。
小学校の時も、僕はみぃ姉のことをいじめるやつに仕返しをしていた。

内緒にしていたんだけど、すぐにバレて怒られて泣かれて。
そして、今のように抱きしめられた。苦しくもなく、ただ僕をオレから戻す為に。

『こっ、この服ヤケにスカートが短いわよ！？』

『良いからキリキリ歩きなさいな』

『くっ、くそっ、坂本め！よくもこのわたしにこんなフザけた事を――』

『無駄口を叩くな！これから撮影会もあるんだから時間が無いんだぞ！』

『な、何ぃっ！？そ、そんなの聞いてないわよ！？』

『ああ。ほんのついさっき、急遽決まったからな』

『お、おのれ坂本ぉぉぉぉーーーーー！！！！！』

遠くで根本の声が聞こえた気がしたけど、今はどうでもよかった。
予断だけど、夏美さんの手によって超絶可愛い美少女に変えられた根本は撮影会も夏美さんの手で写真を撮られていたとか。
色んな衣装の根本の写真はよく売れたらしいのは内緒だ。
そういえば、口調と声も変わるらしくて、見た目も女性と変わらないくらいになってたらしい。
残念だ、僕も見れたらよかったのに。
僕が見れなかったのは、みぃ姉に強制連行されたから。
いつまでたっても心配症な姉だけど、今日は少しだけ嬉しかった。

バカテスト　第十四問

問　次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子&霧島翔夜の答え
『１５４９年』

教師のコメント
正解。特にコメントはありません。

姫路亮の答え
『１５４９年』

教師のコメント
正解。特にコメントはないです。

坂本雄二の答え
『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った１９９３』

教師のコメント
ロマンチックな表現をしても間違いは間違いです。

坂本雪菜の答え
『１５４５年だったと思います』

教師のコメント

惜しいといえばいいのかもしれませんね。

第１４問（前書き）

光闇雪様、ＦＯＯＬ様、秋雨様

感想ありがとうございます！！

第１４問

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われていたのにも関わらず
ここまで来れたのは、他でもない皆の協力があってのことだ。感謝している」

壇上の雄二が礼を言った。
珍しいこともあるもんだと思ったのは僕だけではないと思う。

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ？」

「ああ、自分でもそう思う。だが、これは偽らざる俺の気持ちだ」

「雄兄、でも……それは終わってからの方がいいよ」

明久が焦りながら言うと雄二は平然とした態度で言い、雪菜ちゃんはおずおずとしたように雄二に話しかけていた。

「ああ、そうだな。ここまで来た以上、絶対にＡクラスにも勝ちたい。
勝って生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！！」

『おおーっ！！』

『そうだーっ！！』

『勉強だけじゃねぇんだーっ！！』

最後の勝負の前に、皆の気持ちが一つとなったそんな気がした。
「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎打ちで決着を付けたいと考えている」
先日の昼食時に聞いた話だったから驚きはしなかったけど、クラスの皆はかなり驚いているみたい。
教室内でざわめきが広がってる。
『どういう事だ？』
『誰と誰が一騎打ちするんだ？』
『それで本当に勝てるのか？』
「落ち着いてくれ。それを今から説明する」
雄二が教壇を叩いて皆を静まらせる。
「やるのは当然、俺と翔子だ」
Aクラス代表の霧島翔子さんとFクラス代表の坂本雄二。
クラス間の戦争を代理で行うのだから、代表同士の一騎討ちは当然といえば当然なんだけど。
でも、どうやって勝とうとしているかは知らないんだ。
翔夜はこのことを分かっているのだろうか？
「でも、どうやって勝つのさ。霧島さんは強いんでしょ？」

「まぁ、明久の言う通り確かに翔子は強い。まともにやりあえば勝ち目はないかもしれない」
明久の疑問に雄二はもっともだというように頷いて肯定する。
「だが、Dクラス戦もBクラス戦も同じだっただろう？
まともやりあえば、俺達に勝ち目はなかった」
確かにそうだよな、今こうして勝ちぬいてこれたのは奇跡としかいいようがないし。

「今回だって同じだ。俺は翔子に勝ち、FクラスはAクラスを手に入れる。
俺達の勝ちは揺るがない」
ここまで勝利を導いてきた雄二を否定する理由はないけど、大丈夫なのか？
「俺を信じて任せてくれ。過去に神童とまで言われた力を、今に見せてやる」
『おおぉーっ！！』
信頼の証としてクラスメイト達は雄たけびをあげた。
「さて、具体的なやり方だが……一騎打ちは、フィールドを限定するつもりだ」

「フィールド？　何の教科でやるつもりじゃ？」

「日本史だ。」

どうして日本史なんだろう？

霧島さんが不得意というわけではないだろうし。

何か意味があるのかな。

「ただし、内容は小学生程度、方式は１００点満点の上限あり。召喚獣勝負ではなく、純粋な点数勝負とする」

「小学生程度のレベルで満点ありね」→真希

「それだと、満点が前提となって、ミスした方が負けるといった注意力勝負になるんじゃないですか？」→僕

「正面きってやりあうよりは勝ち目があるかもしれませんけど」→雪菜

「でも同点だったら、きっと延長戦だよ？

そうなったら問題のレベルも上げられちゃうだろうし、ブランクのある雄二には厳しくない？」

勝ち目が少しはあるかもしれないけど、あまりにも分が悪いだろ。

「おいおい、あまり俺を舐めるなよ？

幾らなんでも、そこまで運に頼り切ったやり方を作戦などというものか」

「？？　それなら、霧島さんの集中を乱す方法を知っているとか？」
明久が不思議そうに言うと雄二は明久を見て
「翔子なら集中なんてしていなくても、小学生レベルのテスト程度なら、なんの問題もない」
「雄二、あんまりもったいぶるでない。このからくりのネタを明かしてもくれないじゃろうか？」
クラスの皆も秀吉の言葉に頷いていた。
「あぁ、すまない。つい前置きが長くなった」
かぶりを振って、雄二は改めて口を開いた。
「俺がこのやり方を採った理由は一つ。ある問題が出ればあいつは確実に間違えると知っているからだ」
ある問題？　なんだろう。
「その問題はーー『大化の改新』」
「大化の改新？　誰が何をしたのか説明しろ、とか？
そんなの小学生レベルの問題で出てくるかな？」
確かにお受験校なら出てくるかもしれないけど、そんな簡単な問題がでるかな？

「いや、そんな掘り下げた問題じゃない。もっと単純な問いだ」
「単純というと何年に起きた　とかのことですか？」→雪菜ちゃん
「おっ。ビンゴだ、雪菜の言う通り、その年号を問う問題が出たら、俺達の勝ちだ」

大化の改新の年号とは、明久でもわかりますよ。
そんな基礎問題を霧島さんが間違えるかな？
翔夜でも間違えないだろうし。

「大化の改新が起きたのは、６４５年。こんな簡単な問題は明久ですら間違えない」

雄二が言うので明久を見ると明久は視線をそらしていた。
真希ちゃんがため息をはいてるよ。

「だが、翔子はお前が今言った年号に絶対に間違える！　これは確実だ。
だからその問題が出たら俺達の勝ち。　はれてこの教室とはおさらばだって寸法だ！」

「あの、坂本君？」

「ん？　なんだ、姫路」

みぃ姉が雄二に話しかけた。
何か気になることがあるのだろうか？

「霧島さんとは、仲が良いんですか？」

「亮から、聞いてないのか？　翔子とは幼なじみだ」
あ、そういえば。教えてなかったな。
別にいいかな？
「総員、狙えぇっ！」
「なっ！？　なぜ明久の号令で皆が急に上履きを構える！？」
明久の号令で構えるＦクラスの皆、そんなことしていいのかな？
「黙れ、男の敵！　Ａクラスの前にキサマを殺す！」
「雄兄をいじめたら、だめですっ！！」
雪菜ちゃんが涙目で雄二を庇うように前に出て言う。
基本的に雄二が悪くないと判断したら守る子ですもんね、雪菜ちゃんは。
「アキ兄、クラスの皆。雪菜ちゃんを泣かせたら、どうなるかわかるよね？」
真希ちゃんが笑顔でナイフを見せながら言った。
いつまにナイフを持ってたのかツッコミたいんだけど、場違いだよね。
あ、みんな一斉にコクコクと頷いてるよ。
「皆、冷静になって考えてみるがいい。　相手はあの霧島翔子じゃぞ？

男である雄二に興味があるとは思えんじゃろうが」
秀吉が言うと一斉に雪菜ちゃんと真希ちゃんとみぃ姉の方に向いた。
いや、秀吉。それが実はあるんだよ。
なにせ、まじかで僕は見ていたからね。
翔夜の愚痴もエスカレートしていたりもするしね。

「とにかく、俺を翔子は幼なじみで、小さい頃に間違えて嘘を教えていたんだ」

落ち着きを取り戻した雄二が周りを見て言う。
だけど、雄二。雪菜ちゃんの頭を優しく撫でながらだと威力が半減しそうなんだけど。

「アイツは一度教えたことは忘れない。　だから今、学年トップの座にいる」

今回はそれが仇となる、か。
翔夜は一度覚えたら忘れない方だったな。

「俺はそれを利用してアイツに勝つ。　そうしたら俺達の机は――」

『『『『システムデスクだ！』』』』』

それから、代表である雄二と副代表の雪菜ちゃんと僕とみぃ姉、真希ちゃん、秀吉、康太でAクラスに行くことになった。

第１４問（後書き）

感想と評価をお待ちしております！！

バカテスト　第十五問

問　次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　鎌倉幕府設立』

姫路瑞希と姫路亮の答え
『１１９２年』

教師のコメント
正解です。かんたんでしたか？

吉井明久の答え
『１１２９年』

教師のコメント
間違ったごろで憶えないでください。

吉井真希の答え
『１１２９と見せかけて１１９２年』

教師のコメント

思わず、ずっこけてしまいました。
フェイントは止めてください

坂本雪菜
『１１９２年』

教師のコメント
坂本君の妹さんはしっかりと覚えているようですね。

第１５問（前書き）

ＦＯＯＬ様、光闇雪様、秋雨様、ヒョウガ様、暁　巧様

感想ありがとうございました！

第１５問

「一騎討ち？」

「ああ。Ｆクラスは試召戦争として、Ａクラス代表に一騎討ちを申し込む」

恒例の宣戦布告。
今回は代表である雄二を筆頭に、僕、みぃ姉、真希ちゃん、明久、雪菜ちゃん、秀吉に康太と首脳陣勢揃いでＡクラスに来ているんだ

「うーん、何が狙いなの？」

現在雄二と交渉のテーブルについているのは木下君の双子のお姉さんの木下優子さん。

「もちろん俺達Ｆクラスの勝利が狙いだ」

木下さんが訝しむのも無理はないよな。下位クラスに位置する僕達が、一騎討ちで学年トップの霧島さんに挑むこと自体が不自然なのだから。
当然裏になにかあると考えるのは普通だしね。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることができるのはありがたいけどね、だからといってわざわざリスクを冒す必要も無いかな」

「賢明だな」

予想通りの返事。ここからが交渉の本番となる。

「ところで、Ｃクラスの連中との試召戦争はどうだった？」
雄二が腕を組み、顎に手を当てながら訊く。
「時間は取られたけれど、それだけだったよ？　なんの問題もなし」
秀吉と真希ちゃんの挑発に乗り、昨日Ａクラスに攻め込んだＣクラス。
その勝負は半日で決着がつき、今ＣクラスはＤクラスと同等の設備で授業を受けている。
「Ｂクラスとやりあう気はあるか？」
「Ｂクラスって……、昨日来ていたあの（、、）……」
「ああ。　アレが代表をやっているクラスだ。　幸い宣戦布告はまだ出されていないようだが、さてさて。　どうなることやら」
「でも、ＢクラスはＦクラスと戦争したから、三ヶ月の準備期間をとらない限り、試召戦争はできないはずだよね？」
試召戦争の決まりの一つ、準備期間。
戦争に敗北したクラスは三ヶ月の準備期間を経ない限り自ら戦争を申し込むことはできない。
これは負けたクラスがすぐさま再戦を申し込んで、試召戦争が泥沼化しない為の取り決めとなってるの。
「知っているだろ？　実情はどうあれ、対外的には、あの戦争は『和平交渉にて終結』となっているってことを。　規約には何の問題

もない。……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな」
これは設備を入れ替えなかったからこそできる方法なわけだ。
「……それって強迫？」
「人聞きが悪い。　ただのお願いだよ」
確かに、この交渉の仕方、悪役だしな。
よくない交渉だと思うんだけど。
「う～ん……わかったよ。何を企んでいるのか知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ」
「え？　本当？」
意外とあっさりした返事に驚いて会話に参加していない明久が声をあげていた。
「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」
そういえば、夏実さんが根本君に女装させてたっけ。
その結果で交渉が通るなんて凄いかも。
「でも、こちらからも提案。　代表同士の一騎打ちじゃなくて……お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち」
「いいだろう。ただし、科目はこちらが貰うぞ」

と木下さんが言うと雄二は考えてから頷いて言う

「全部はさすがにダメよ。五回中三回はそちらにあげる」

「わかった」

木下さんは雄二を見て言うと雄二は了承した。

「交渉成立ね」

そう言って木下さんが緊張をとこうとしていると

「……待って」

静かな、でも凛とした声が響いてそちらを見るとAクラス代表の霧島翔子さんがいた。

つまり、僕の親友のお姉さんなわけで。

「翔子か」

「代表？」

雄二と木下さんは突然現れた霧島さんを見て呟いた。

そして、なんでか霧島さんの視線が真希ちゃんに来た。

「な、何？」

真希が聞くと答えないまま霧島さんは雄二を見た。

「……雄二。個人的な賭けをしない？」

「断る」
雄二が即答した。少しは悩んであげてもいいと思うのに。
「……雄二達が勝ったら諦めてもいい」
「……本当か？」
霧島さんは雄二の答えに気にしたこともないのか言うと雄二は聞いた。
すると霧島さんは頷いた。
「わかった。勝負は十時からでかまわないか？」
「……かまわない」
交渉を終わると僕達はＡクラスから出て行く。
「雄二、負けたら」
「わかってる……雪菜の為にも設備をなんとかしないとな」
僕と雄二は教室に戻る中、勝敗を考えて言うと雄二は考えながら呟いた。
霧島さんを傷つけることになるのだろうか
そう思うと、勝っていいのかすら、悩んでしまう。

第１５問（後書き）

感想と評価をお待ちしております

亮「僕と真希ちゃんの活躍もお楽しみに」

真希「でも、今回は亮くんだけかもよ？」

亮「そうなのですか？」

真希「うん」

バカテスト　第十六問

第１２問　問　次の（　　）に正しい年号を記入しなさい。
『（　　）年　大化の改新』

坂本雄二の答え
『６４５年』

教師のコメント
正解です。憶え方は無事故（６４５）の改心ですね。

霧島翔子の答え
『６２５年』

教師のコメント
珍しいですね？霧島さんがこんな簡単な問題を間違えるなんて。

姫路亮の答え
『６４５年』

教師のコメント
正解です、お姉さんと仲良くしてくださいね

吉井明久の答え
『６４５年』

教師のコメント
せ、正解です。真希さんに教えてもらったのでしょうか？

吉井真希の答え
『６４５年』

教師のコメント
正解です、今回はおちゃめ度をださなかったみたいですね

第１６問（前書き）

光闇雪様、ヒョウガ様、秋雨様

感想ありがとうございます♪

第１６問

「両名とも準備は良いですか？」

高橋先生は立ち会いし、眼鏡を押さえて代表達に聞いた。

「ああ」

「……問題ない」

会場はＡクラスだ。どこか緊張した空気が満ちる。

「じゃあ、アタシから行くよ」

向こうは秀吉の姉の木下優子さん。

対するこちらは

「ワシがやろう」

その弟、木下秀吉だ。

「ところでさ、秀吉」

「なんじゃ？　姉上」

優子さんが秀吉を見て何か聞こうとしてる？

秀吉も不思議そうに見てるけど

「Cクラスの小山さんって知ってる？」

「はて、誰じゃ？」

Cクラスの小山って確か、真希ちゃんと秀吉が罵倒しに行ったクラスの代表さんじゃなかったけ。
あれ、何気にやばい展開になってる？

「じゃーいいや。その代わり、ちょっとこっちに来てくれる？」

「うん？　ワシを廊下に連れ出してどうするんじゃ姉上？」

真希ちゃんは大丈夫だけど、秀吉は危ないよね。
なんで、真希ちゃんは大丈夫かというとあの能力を知ってる人間が少ないからだよ。

『姉上、勝負は――どうしてワシの腕を掴む？』

『アンタ、Cクラスで何してくれたのかしら？　どうしてアタシと代表がCクラスの人達を豚呼ばわりしていることになっているのかなぁ？』

今、廊下で優子さんと秀吉の会話のやりとりが聞こえてくる。

『はっはっはっ。それはじゃな、ワシなりに姉上の性格を推測してーーあ、姉上っ！
ちがっ……！　その関節はそっちに曲がらなっ……！』

秀吉、嘘でもいいから。違う事を言えば良かったのに。

あ、真希ちゃんが不機嫌になってきてる。
そういえば、過度の暴力が嫌いだったけ

ガラガラッ

「秀吉は急用が出来たから帰るってさっ。　代わりの人を出してくれる？」

扉を開けて優子さんが戻ってくると返り血をハンカチでぬぐいながら言う。

「い、いや」

「僕が行きますよ」

雄二が不戦勝を言う前に僕は笑顔で告げた。
さすがにやりすぎだしね。
真希ちゃんにさせるわけにもいかないし。

「お、おい」

「いいよな、代表？」

僕から俺に代わって言うと

「はぁ、好きにしろ」

すぐに返事がきた。

「おう。てなわけで、俺が代わりに行く」
俺が振り向いて言うと
「そうですか。　それではとりあえず……」
高橋先生がノートパソコンを操作すると、壁二面の大きなディスプレイに結果が表示された。

〔Ａクラス　木下優子　生命活動　ＡＬＩＶＥ　ＶＳ　Ｆクラス　木下秀吉　生命活動　ＤＥＡＤ〕

いやいや、まだ生きてるからな。勝手に殺すなよ。
「亮君、教科は何にしますか？」
「じゃあ、数学で」
くん？なんか、熱ぽい目で見られてるんだけど。
どうしたというんだ？
選択科目はもらっておくか。
「では、始め！」
「「試獣召喚（サモン）！」」
高橋先生の宣言通りに召喚獣を召喚する。

優子さんのは洋風甲冑に槍を装備している、俺のは『・ｈａｃｋ／／Ｇ・Ｕ・』の『ハセヲ（２ｎｄフォーム）』の状態だ。
得意科目だから、点数は高めなんでね。

〔Ａクラス　木下優子　数学　３７６点　ＶＳ　Ｆクラス　姫路亮　数学　４１０点〕

俺と相手の点数を見てＡクラスのヤツもＦクラスのヤツも騒ぎだした。

「さて、行こうか。”相棒”」

俺は召喚獣の腕輪を見せてニヤリと笑って言う。
腕輪が光って俺の召喚獣に文様が浮かび、光の中から出てきたのはスケイスだ。
スケイスは黒い人形みたいな姿をしており、手には鎌を持っていた。

「な、なによ。これっ！」

「俺の腕輪の能力さ」

優子さんは驚きながら言うので俺は笑顔で言う。
そして…スケイスを見上げてから

「チェックメイトだ」

俺の言葉に従い、スケイスが優子さんの召喚獣に鎌を振りおろして一撃で消滅した。

「しょ、勝者。Ｆクラス！」
高橋先生ははっと我に返ると言った。
〔Ａクラス　木下優子　数学　０点　ＶＳ　Ｆクラス　姫路亮　数学　４１０点〕

「そ、そんな」
「僕が貴方と戦ったについて、教えてあげます。
実の弟に対して、過度の暴力をしすぎているからですよ」
優子さんを見て僕は言う。
なんでもかんでも暴力で相手を封じればいいわけではないのだから。
相手が暴力でするなら、こちらもそれなりのやり方で押しとどめるだけ。
「それは、秀吉が」
「確かに、秀吉君も言い方がいけないこともあります。でも、僕からしたらどっちもどっちですよ」
僕を見て優子さんは言うと呆れながら僕は言った。
「うっ」
「お互いの悪い所を相談して直していくことです。これは僕からの

お願いですよ。」

座りこんで俯いたままの優子さんに笑顔で言うと優子さんの顔が真っ赤になった。

あれ？　熱でもあるのかな？

「……うん／／／／」

「よし、約束ですよ。」

優子さんは頷いて言うので僕は笑顔で言うと自分のクラスに戻った。

さて、秀吉の容体をみないと。

第１６問（後書き）

亮が変になったかもしれない。

いや、フラグメーカになったかも（汗）

バカテスト　第十七問

問　以下の問に答えなさい。
『１８５３年に黒船で横浜にやってきたのはだれですか。』

姫路瑞希＆姫路亮の答え
『ペリー』

教師のコメント
正解です。さすが、双子ですね

吉井真希の答え
『ペリー』

教師のコメント
正解です！！　こうやっていつも真面目に書いてくれたら助かるんですがね。

吉井明久の答え
『ペルー』

教師のコメント
惜しいですが間違いです。

坂本雪菜の答え
『ルソー』

教師のコメント
先生もそのゲームは好きですよ。

霧島翔夜の答え
『ペルー』

教師のコメント
違います。わざとですか？

第１７問

「では、次の方どうぞ」

「私が出ます。　科目は物理でお願いします」

僕等が戻ると高橋先生が次の試合を宣言しました。
Ａクラスからは佐藤美穂さんですか。　えっと、Ｆクラスからは

「よし。　頼んだぞ、明久」

「え！？　僕！？」

おや、ここで明久に頼みますか。
真希ちゃんが睨んでいるというのに、どこまで明久いじりをしたがるのでしょうか。

「大丈夫だ。　俺はお前を信じてる」

あれは単に面白がってるだけですね

「ふぅ……。やれやれ、僕に本気を出せってこと？」

「ああ。　もう隠さなくてもいいだろう。　この場にいる全員に、お前の本気を見せてやれ」

本気つまり、本気でバカだというところを見せろといいたいんでし

ょうね。
僕が呆れていると周りが騒ぎだした。
「おい、吉井って実は凄いヤツなのか？」
「いや、そんな話は聞いたことないが」
「いつものジョークだろ？」
いつも明久をみたらそう思うでしょうね。
でも、今回の明久はいつもと違いますよ。
勉強を真希ちゃんとしていましたしね。
「吉井君、でしたか？　あなた、まさか……」
対戦相手の佐藤さん、あれは絶対に勘違いしていますね。
「あれ、気付いた？　ご名答。　今までの僕は全然本気なんて出しちゃあいない」
明久が戦闘の為に袖をまくり、手首を振ります
「それじゃ、あなたは……！」
「そうさ。　君の想像通りだよ。　今まで隠してきたけれど、実は僕――」

明久は大きく息を吸い、この場にいる皆に告げます

「――左利きなんだ」

【Ｆクラス　吉井明久　物理　１３０点　ＶＳ　Ａクラス　佐藤美穂　物理　３８９点】

明久の点数が上がってますね。
真希ちゃんとの勉強の成果でしょうか。

でも、負けてしまったんですよね。
良い戦いはしていたんですけど、途中で集中力が切れてしまったみたいです。

「いててっ、本気出したんだけどなぁ」

「でもアキ兄、テストの点数に利き腕は関係ないですよ？」

戻ってきた明久に真希ちゃんは苦笑いしながら伝えた。

「でもすごいじゃない。　いつの間にあんな点数になったの？」

「あれは、真希が教えてくれたからだよ」

美波ちゃんは明久を見て聞いたので明久は理由を説明した。
そうしないとあんな点数は取れないし、Ｃクラス並の実力にはならないですしね。

＊＊＊＊＊

真希ｓｉｄｅ

「では、三人目の方どうぞ」

「……（スック）」

こちらからは康太君がでます。

あちらは……

「じゃ、ボクが行こうかな」

Ａクラスからは色の薄い髪をショートカットにした、ボーイッシュな女の子が出てきました。

確か一年の終わりに転校してきた工藤愛子さんですね

「一年の終わりに転入してきた工藤愛子です。　よろしくね」

アキ兄達の心が分かったのか、ちゃんと説明してくれる、工藤さん

「教科は何にしますか？」

高橋先生が康太君に訊ねます。

勿論科目は決まってます

「……保健体育」

康太君の唯一にして最強の武器が選択されます

「土屋君だっけ？　随分と保健体育が得意みたいだね？」

工藤さんが康太君に話しかけます。どうやら、康太君の実力を知らないみたいですね。
随分と余裕のある顔ですから

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね♪」

アキ兄達の顔がその時だけ赤くなったような気がします
実技と聞いただけで、この反応ですか。

「そっちのキミ、吉井君だっけ？
勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？　もちろん実技で」

工藤さんにアキ兄が指名されました。

「本来なら望むところだけど、真希の笑顔が怖いからやめときます」
と、アキ兄は苦笑いしながら言った。
当然です、美波ちゃんと瑞希ちゃんにいずれ教えてもらえるはずなのですから。
工藤さんに教えてもらうのは遠慮するべきです。

「そろそろ召喚を開始してください」

「ムッツリー二、大丈夫？」

「……な、なんのこれしき！」

高橋先生の声を聞きながら明久が聞くと康太はなんとか立ちあがる。

「はーい。試獣召喚（サモン）」

「……試獣召喚（サモン）」

二人に似た召喚獣が呼び声により、武器を持って召喚される。
ムッツリー二の召喚獣の武器は小太刀の二刀流。一方工藤さんの方は……

「巨大な斧！？」

アキ兄が工藤さんの召喚獣を見て驚いて叫びます。
確かに破壊力抜群の巨大な斧ですからね。　腕輪までしているようですし

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ」

工藤さんが艶ぽく笑いかけるのと同時に、腕輪を光らせながら召喚獣が動いた。

巨大な斧に雷光をまとわせ、ありえないスピードで康太君の召喚獣に詰め寄る。

「それじゃ、バイバイ。ムッツリーニ君」

そして豪腕で斧を振るう。これはよけきれないでしょうか？

「ムッツリーニっ！」

斧が召喚獣を両断するかと、思いきや

「……加速」

思った直後、康太の腕輪が輝き、彼の召喚獣の姿がブレました。

「……え？」

相手の戸惑う顔が見えます。

それはそうですよね、いきなりブレたのですから。

「……加速、終了」

ボソリと康太君が呟くと一呼吸おいて工藤さんの召喚獣が全身から血を噴き出して倒れた。

【Ｆクラス　土屋康太　保健体育　５７２点　ＶＳ　Ａクラス　工藤愛子　保健体育　４４６点】

この戦いは康太君の勝ちで決まりました。

「そ、そんな……！この、僕が……！」

工藤さんは膝をついている、相当ショックだったようですね。
これで二対一ですかね。
こっちが一歩リードしています

第１７問（後書き）

感想と評価を楽しみに待ってます！

バカとテスト

問　以下の問いに答えなさい。

時に食用できる地下茎を持つ、英語で「ｌｉｌｙ」という名の植物を答えなさい。

姫路瑞希と姫路亮の答え

「ユリ」

教師のコメント

正解です。さすがですね、姫路さんに亮くん。

吉井明久の答え

「山芋！ジャガイモ！サツマイモ！」

教師のコメント

食用以外にも注意を向けてください

吉井真希の答え

「ユリ」

教師のコメント

正解です。さすが、真希さんですね。

坂本雪菜の答え

「りりい？」

教師のコメント

英語は苦手のようですね

第１８問

「次の方は？」

高橋先生は淡々と作業をすすめる。
内心は平常心でいられてないでしょうね。

「あ、は、はいっ。　私ですっ」

こちらからはみぃ姉がでます。
Ｆクラスにいながら Ａクラス並みの実力を持っているから当然でしょうね。

「それなら僕が相手をしよう」

Ａクラスからは久保利光ですか。
噂では真希ちゃんと明久に興味があったような。
ところで、翔夜がいませんけど。
いったいどうしたというのでしょうか。

「やはり来たか、学年次席」

彼の名前は久保利光。
みぃ姉に次ぐ学年五位の実力の持ち主で、振り分け試験をみぃ姉と僕がリタイアして、真希ちゃんが休んだから。
彼が学年次席の座にいます。

「ここが一番の心配どころだ」

雄二が心配するのも無理ないでしょう。
久保君の実力はみぃ姉とほぼ互角です。総合科目の点数差にして２０点程度しかありません。
みぃ姉が連戦で疲れている今、負ける可能性が高くなってるというわけです。

「科目はどうしますか？」

高橋先生が二人に声をかけます。
科目の選択権はあちらですので何を選ばれるのか、僕にもわかりません。

「総合科目でお願いします」

ここで総合科目を選びますか。
よほど自信があるんでしょうね。みぃ姉は大丈夫でしょうか。
僕は心配になりみぃ姉を見る。

「はい、構いません」

みぃ姉は真剣な目で久保君を見ています。
覚悟はあるようですね、頑張ってください。僕は応援しています。

「それでは……」

高橋先生は前と同じように操作して召喚獣を呼び出す。

【Ａクラス　久保利光　総合科目　３９９７点　ＶＳ　Ｆクラス

姫路瑞希　総合科目　４４０９点】

「いつのまにこんな実力を」

そう久保君が言うと召喚獣を動かす、次にみぃ姉が

「わたし、決めたんです。頑張ろうって！」

そう言うとみぃ姉が召喚獣を動かす。

「どうして、戦争を始めたのか聞いたんです。だから、負けられないんです」

相手の動きをよけて剣で相手を真っ二つにした。

勝敗がこれで決まった。

「ぐっ……！　姫路さん、どうやってそんなに強くなったんだ…？」

悔しそうに久保君がみぃ姉に聞いた。

つい最近までは拮抗していた実力がいつの間にかここまで離されてたんです。

気になるのも当然でしょうね。僕も驚きましたし。

「……私、このクラスの皆が好きなんです。　人のために一生懸命な皆のいる、Ｆクラスが」

「Ｆクラスが好き？」

「はい。　だから、頑張れるんです」

好きな人の為なら頑張れるということですか。
みぃ姉はこんな頭の悪いクラスでも皆が好きなんですね。
僕も嫌いではないですね、このクラスは。
だから、みぃ姉の気持ちもわからなくはないです。

「しょ、勝者。Ｆクラス。三対一で、Ｆクラスの勝利です！」

驚きながらそう高橋先生は勝利を告げると

「待ってください」

という声が聞こえた。
彼は翔夜君ではないですか。
多分、お姉さんのことで黙っていられなかったのかもしれませんね。

「翔夜君、どうしました？」

「個人戦を特別ルールでやりましょうよ」

高橋先生が聞くと翔夜君は笑顔で言った。
姉思い仲間としては褒めたいですけど。

「ですが」

「学園長には許可をもらってあります」

なおも高橋先生がしぶると翔夜君はにこっと笑ってさらりと言った。
だから、みぃ姉の時にはいなかったんですね。

「俺達にメリットがないようだが？」

「それに関してはご安心を。
個人戦でこちらが勝ってもFクラスの設備のランクダウンはせずに、Cクラス並みの設備にしてくれるそうですよ」
雄二は戦う必要性がないと言うと翔夜君は雄二を見てにこやかに言った。
「それなら、悪い話ではないな」
雄二はそれを聞くと悩みながら答えた。
「翔夜、ありがとう」
「翔姉の悲しむ顔はみたくないですからね」
とても嬉しそうに翔子さんが言うと翔夜が笑顔で言った。
「でも、提案してくれたのは工藤さんの弟君と木下さんの妹さんなんですけどね」
苦笑いしながら翔夜が言うと、落ち込んでいた工藤さんと木下さんが立ちあがって
「「それどういうこと！！？」」
おおっ、以心伝心のように二人の声が揃った。
「えっと、それは後で教えますから」

「わかった」

「でも、絶対教えてよね」

翔夜君が工藤さんと木下さんに言うと二人は腑に落ちないながらも諦めて言い、会話をやめた。

第１８問（後書き）

亮「まさか、ここで翔夜君が出るなんて」

翔夜「翔姉が落ち込んでいたし、他の協力者もいたしね」

でも、どうやって教えてもらったの？

翔夜「携帯電話だよ」

なるほど！

まだまだ、続きます！

第１９問

「では、Ｆクラス対Ａクラスの個人戦の教科はどうしますか？」
高橋先生が雄二に教科を聞きました。
個人戦の選択権は雄二が持っていますからね
「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」
雄二の宣言で、Ａクラスにざわめきが生まれます
「上限ありだって？」
「しかも小学生レベル。　満点確実じゃないか」
「注意力と集中力の勝負になるぞ……」
クラスのみんなが勝てるかもと思いながらざわついていますね。
「分かりました。　そうなると問題を用意しなくてはいけませんね。
少しこのまま待っていてください」
一度、ノートパソコンを閉じて高橋先生が教室を出ていきます。
小学生レベルのテストの資料を取りに戻ったのかもしれませんね。

＊＊＊＊＊＊

真希ｓｉｄｅ

「雄二、後は任せたよ」

ぐっと雄二君の手をアキ兄が握ります

「ああ。　任された」

「……（ピッ）」

康太君がこちらに歩み寄って、ピースサインを雄二君に向けます
というか、これだけでわかりあえるというのもあるいみ凄いですよね。

「お前の力には随分助けられた。　感謝している」

「……（フッ）」

康太君は口の端を軽く持ち上げて元の位置に戻ります

「雄兄…」

「雪菜。大丈夫だ、絶対勝つからな」

心配そうな雪菜ちゃんが雄二君に近寄ってきました。
すると優しく微笑んで雄二君が言うと雪菜ちゃんの頭を撫でていました。
本当に妹想いですよね。

「雄二君」

「真希か。お前のおかげでここまで来れた、礼を言う」
雄二君はあたしに気付くと笑みを浮かべて言いました。
「礼は勝ってからにしてください。まだ、戦いはあるんですからね」
「ああ、わかってる」
呆れながら言うと苦笑いしながら雄二君は言った。

「坂本君、あの事、教えてくれてありがとうございました」
「ああ。　明久のことか。　気にするな。　後は頑張れよ」
「はいっ」
次に瑞希ちゃんが近づいてきて雄二君を見て笑顔で言いました。
なんでもないことのように雄二君が言うと瑞希ちゃんの元気な返事をした、
雄二君はそれを見て楽しそうにやんわりとした笑みを浮かべると
「あんまり、みぃ姉を悪い方に染めないでくださいね？」

「お、おう」

黒い笑顔で亮君が近づいて雄二君を見て言った。
原作でも結構染めてましたから、心配なんでしょうね。
でも、言う相手が違うような気もします。

「では、最後の勝負、日本史を行います。　参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください」

戻ってきた高橋先生がクラス代表二人に声をかけます

「……はい」

短く返事をして霧島さんが教室を出て行きました
翔夜君はその様子を見送っていました。

「じゃ、行ってくるか」

雄二君はそう言うと歩き出そうとして

「はい。　いってらっしゃい。　坂本君」

「ああ」

瑞希ちゃんが笑顔で言い、雄二君は頷いた。

「ぶざまな真似をさらさないようにしてくださいね」

「しねーよ」

亮君、口が悪いよ。
そんなに瑞希ちゃんに応援されたのが気に食わないのでしょうか。
瑞希ちゃんと亮君に送り出されて雄二君も戦場に向かいました。

真希ｓｉｄｅ・ｅｎｄ

＊＊＊＊

亮ｓｉｄｅ

「皆さんは、ここでモニターを見ていてください」

高橋先生が機械を操作すると、壁のディスプレイには視聴覚室の様子が映し出されました。
先に霧島さんが席に着き、続いて雄二がやってきます

『では、問題を配ります。　制限時間は五十分。　満点は１００点です』

画面の向こうで日本史担当の飯田先生が問題用紙を裏返しのまま二人の机に置きました。

『不正行為等は即失格になります、　いいですね？』

『……はい』

『分かっているさ』

『では、始めてください』

二人の手によって問題用紙が表にされます

「いよいよですね」

「うん」

「そうだね」

みぃ姉も緊張気味に隣の明久と真希ちゃんに声をかけました。
そのとき、参考のためかモニター下部に問題が表示される。
Fクラスの面々は、食い入るようにそれを見ていた。

「これで、あの問題が出ていなかったら坂本君は……」

「集中力や注意力では劣るだろうしね。たぶん延長戦で……」

不安げなみぃ姉に明久が答えました。

「でも！　あの問題が出ていれば！」

そう言ってみぃ姉を見る明久に、みぃ姉はうなずきました。
だれもが、固唾をのんで見守る。時間が刻々と過ぎていき、問題の表示も終わりました。

問．次の（　　）に正しい年号を記入しなさい

（　　）年　平城京に遷都

（　　）年　平安京に遷都

これは誰でも解けますね。
ですが、あの問題が出てきませんね

「出て……ない？」

「そんな……」

「なんてこった……」

「負けるのか？　俺たち……」

件の問題が出てなかったことでクラスに動揺がはしりました。
そんな彼らに元気を注入するような声が響く。

『まだですっ！　まだ、結果は出ていませんっ！』

雪菜ちゃんは問題を食い入るように見つめながら言いました。

テストが終了し、飯田教諭が答案用紙を回収されて採点に移りました。
しばらくして、採点と確認が終わり、二人の点数を入力されてました。

「採点も終わったようですので、結果を発表します」
落ち着いた声で、高橋教諭が宣言しました。
『Ａクラス　霧島翔子　１００点』
Ａクラスからは、さも当然という空気が流れてきた。
対するＦクラスはお通夜状態となっていました。
次は雄二の番で、ディスプレイに点数が表示されます。
『Ｆクラス　坂本雄二　１００点』
ほっと周りに安堵のため息がもれました。
なんとか同点をとったみたいですね。
「同点となりましたので、五分後に延長戦を行います。
みなさんは、引き続きこの教室で待機となります」
結果を受けて、高橋教諭が宣言しました。
表情は驚いているようですね。
画面上では、飯田教諭が次の問題の準備をしていました。
翔子さんも雄二も身じろぎひとつしていません。
みぃ姉は不安を隠すことができていないようですけど。
「雄兄…」
雪菜ちゃんは祈っていました。
雄二が勝つのを願っているようですね。

画面の向こうで、新たな問題用紙が配られるました。
そして、緊張感に満ちた延長戦五十分が開始されました。
先ほどと同じように、画面下に問題が表示されていきます。

全員も問題を見ながら祈るように願っていた。
けど、次も件の問題がでなかった。
そして、テストが終了して解答用紙が回収されて採点にうつる。
数分後、採点が終わるとさきほど、同じようにディスプレイに表示された

『Ａクラス　霧島翔子　１００点』

『Ｆクラス　坂本雄二　１００点』

またもや、同点になってしまいまして、今度はＡクラスがざわめきだしました
ここまで集中力が持ちましたけど、次で件の問題がでないとやばいかもしれませんね。

また、同点だったので五分後に延長戦を行うことになった。
画面上では飯田先生が次の問題を用意しており、雄二は頭を抱えて、翔子さんは少し焦りが見えていました。

「大丈夫かな」

「信じるしかないよ」

雪菜ちゃんは不安そうに言うと明久が苦笑いして言った。
画面の向こうで新たな問題用紙が配られました。
そして、また緊張感に満ちた延長戦五十分が開始されました。

先ほどと同じように、画面上に問題が表示されていくと

「……出た……」

その声はFクラスの誰だったかは判りませんでした。
声が聞こえた瞬間、Fクラスの全員がディスプレイを注視しました。
そしてそこには……。

（　　）年　鎌倉幕府設立

（　　）年　大化の改新

そう映し出されていました。

「……出た」

明久は呆然とつぶやいていました。
二回も延長戦をしたから、でないと思っていましたけど。
ついに出ましたね。

「やった！」

雪菜ちゃんは本当に嬉しそうに笑っていました。
でも、抱きつくはやめてください。
翔夜君から凄い睨みがきてますので（汗）

そして、五十分が過ぎ去り、飯田教諭が解答用紙を回収して採点を始めました。
結果が入力されました。

その結果を見た、高橋教諭の形の良い眉が跳ねました。

「結果を発表します。」

高橋先生が言うとディスプレイに結果が表示されました。

『Ａクラス　霧島翔子　９７点』

その結果を見て、打ちのめされるＡクラスの生徒たちと苦笑いした翔夜くん。

対するＦクラス側の表情は明るかったです。

次に雄二の結果が表示されました。

『Ｆクラス　坂本雄二　９２点』

延長戦が続いて集中力が途切れてしまったのでしょうね。

「くそっ！……すまねぇみんな。」

「雄二はよく頑張ったよ！雪菜ちゃんだって、そう思ってるよ！」

『そうだぞ！実際俺らがやったら３０点も採れないしな！』

落ち込んでいる雄二に明久が近寄って言い、クラスのみんなも励ますように言った。

団体戦はこちらの勝ちだけど、個人戦はこちらの負けですか。

「亮、少しいいですか？」

「設備交換のことなら、ランクアップのことで帳消しですよ？」
翔夜君が来たので僕は笑顔で言う。
一応団体戦で勝ちはしたのだから、問題はないでしょうしね。
「いいんですか？」
「元々、そのつもりでいましたので」
翔夜が不思議そうに言うと僕は笑顔で言った。
「ちょ、何を勝手に」
「個人戦での戦いはランクアップの約束だったじゃないですか。
それに、ここまで勝てたのだからよいと思いますよ」
雄二が割り込むので僕は笑顔で言いました。
それを聞いて雄二は黙り込む。
「そっちが勝ってるのに和平でいいんですね」
「えぇ、勝った方の言うことは聞くという約束ですしね。
団体戦での勝者は僕らFクラスです。その約束を聞いてくれますか？」
翔夜が僕を見て言うので笑顔を見せて答えた。
「ふっ、亮らしいですね。翔姉はそれでいい？」
「……構わない」

翔夜君は笑うと翔子さんに聞いて承諾をもらいました。
こうして、僕らの試召戦争は終わりました。

バカテスト

問題　次の（　）に正しい年号を記入しなさい。

『（　）年　キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『１５４９年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った１９９３』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです

霧島翔夜の答え

『１５４９年』

教師のコメント

正解です

坂本雪菜の答え

『雪兎を作って、楽しく遊んだ１５６２年』

教師のコメント

お兄さんの影響をうけすぎないようにしましょう。

試召戦争　エピローグ

「……ところで雄二、約束」

「は？約束？何のことだ？」

翔子さんが雄二に言うと雄二は不思議そうに言う。

「……負けた方は何でも言う事を聞くって約束」

「その約束はもう使っただろ」

翔子さんは雄二を見て言うと呆れながら雄二が言った。
団体戦のは使いましたね。

「……個人戦は私の勝ちだから」

「な！？屁理屈だろ！！」

翔子さんは当然のように言うと焦りながら雄二が言った。

「……約束は約束。破るなら、翔夜と雪菜をくっつけ」

「わかった。その約束を飲もう」

翔子さん、それは脅しですよ。

「それじゃ……雄二、私と付き合って」

翔夜君が落ち込んでいるのは気にしないんですか。
てか、あまりにも不憫ですよ
「…お前、やっぱりまだ諦めてなかったのか！」
「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き」
雄二が呆れながら言うと堂々と翔子さんが言った。
「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」
「…私には雄二しかいない。他の人なんて、興味ない」
雄二のこと本当に好きなんですね。
「拒否権は？」
「……ない。　約束だから、今からデートに行く」
「ちょっ！　放せ！　やっぱこの約束はなかったことに――」
一応というような態度で雄二君がきくと翔子ちゃんはきっぱりと言いました。
そう霧島さんがいうと雄二の手を握って引っ張って行こうとすると
「義姉さん、わたしも行っていい？」
「…雪菜なら大歓迎」
雪菜ちゃんが小首を傾げて聞いたので即答で了承した翔子さんがい

た。

「あ、なら…僕も」

「おまえは来るなー！！」

翔夜が行こうとすると雄二から憤怒な様子で叫んだ。
シスコンすぎですよ、雄二。

「雄兄、そんなこと言ったらダメだよ！」

「……雪菜の言うとおり」

雪菜ちゃんが頬を膨らまして言うと翔子さんも同意した。
これには雄二もたじたじな様ですね。

「僕はただ、義兄さんの負担を軽くしようと」

「俺を兄と呼ぶなー！！！」

翔夜が悲しそうに言うと雄二はまたもや叫んだ。
これ、いつまで続くのでしょうか。

「でも、義姉さんと結婚するとそうなるよね」

「そ、そうだが」

雪菜ちゃんは笑顔で言いました。
翔子さんと雄二が結婚したらそうなりますね。

「……そろそろ、行く」

しぶれをきらした翔子さんが雄二の手を引いて教室を出ていく。
それに続いて雪菜ちゃんと翔夜もついていく。

「あ、こら！」

「僕等の質問に答える約束ー！！」

木下さんと工藤さんが慌てて翔夜を追いかけていきました。
多分、あの場から逃げたかったからかもしれませんね～。

「さて、Ｆクラスの皆。　お遊びの時間は終わりだ」

すると、そこに野太い声がかかります。
声のした方を見ると、そこには生活指導の西村先生が立っていました

「あれ？　西村先生。　僕らに何か用ですか？」

「ああ。　今から我がＦクラスに補習についての説明をしようとおもってな」

あれ？ランクダウンもしてないうえに団体戦ではこちらが勝っているんですけど。

「お前らは今回、団体戦では勝利を収めたが個人戦では敗れた。

特別約束で設備の上昇は約束されているが、それだけではいかんということらしいのでな。
福原先生から俺に担任が変わるそうだ。　これから一年、死に物狂いで勉強できるぞ」

『『『『何ぃっ！？』』』』』

クラスの男子全員（僕を除く）が悲鳴を上げます。
生活指導の西村先生と言えば、『鬼』の二つ名を持つほど厳しい教育をする先生です。
今回の戦争では補習室の管理もしていましたね。

「優等生の姫路姉弟と真希と坂本妹は免除だがな」

それはとてもありがたいことですね。

「吉井。　お前と坂本は特に念入りに監視してやる。
何せ、開校以来初の『観察処分者』とA級戦犯だからな」

「そうはいきませんよ！
何としても監視の目を掻い潜って、今まで通りの楽しい学園生活を過ごして見せます！」

「……お前には悔い改めるという発想はないのか」

ため息混じりのセリフですね。本当に悔い改めないと明久の将来が不安ですよ。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を二時間設けてやろ

う」

西村先生から逃れるために必死で勉強しそうですね、明久は。
意気込んでいる明久に島田さんが近寄ります。

「ねぇ、アキ。　補習は明日からみたいだし、今日はクレープでも食べに行きましょうか？」

「だ、ダメです！　吉井君は私と映画を見に行くんです！」

おやおや、二人とも積極的ですね。
明久のお金は大丈夫でしょうか？

「に、西村先生！　明日からとは言わず、補習は今日からやりましょう！　思い立ったが仏滅です！」

「『吉日』ですよ、アキ兄」

明久が焦って間違った言葉を言ってます。
それに真希ちゃんがツッコミをいれていました。

「うーん、お前がやる気が出たのは嬉しいが――」

言葉を区切って、明兄と美波ちゃんと瑞希ちゃんを見る西村先生

「無理することはない。　今日だけは存分に遊ぶと良い」

そしてニヤニヤと嫌な笑顔でそう言いました

「おのれ鉄人！　僕が苦境にいると知った上での狼藉だな！

こうなったら卒業式には伝説の木の下で釘バットを持って貴様を待つ！」

「斬新な告白だな、オイ」

本当にその通りですね。

「アキ！　こんな時だけやる気を見せて逃げようったって、そうはいかないからね！」

「ち、違うよ！　本当にやる気が出ているんだってば！」

「吉井君！　その前に私と映画ですっ！」

お金がピンチなようですね。

助けにはいるべきでしょうねと僕が思っていると

「それなら、みんなで行きましょう。今日のお祝いもしたいですし」

真希ちゃんは笑顔で言うと

「そ、そうですね。その方が楽しいでしょうし」

「そ、そうね。みんなで楽しまないと」

みぃ姉と島田さんは笑顔で言います。

これはこれでありかもですね。

僕等は帰る準備して学校から出ていきました

第２０問　清涼祭

雪菜ｓｉｅｄ

桜色の花びらが坂道から徐々に姿を消し、代わりに新緑が芽吹き始めたこの季節。
この文月学園では、新学年最初の行事である『清涼祭』の準備が始まりつつあった。

お化け屋敷の為に教室を改善を始めるクラス。焼きそばの為に調理道具を手配するクラス。
この学校ならではの『試験召喚システム』について展示を行うクラス。
学園祭準備の為のＬＨＲ（ロングホームルーム）の時間は、どの教室も活気があふれている。
わたし達、Ｆクラスはというと……

「さて、そろそろ春の学園祭、“清涼祭”の出し物を決めなくちゃいけないんだが……」

双子のお兄ちゃんの雄兄が椅子に座ってる全員に言います。

「とりあえず、議事進行並びに実行委員として、誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた」

心の底からどうでも良さそうな態度の雄兄。
興味がないのがみてわかります。多分、全部他人に押し付けて雄兄だけは寝るつもりなのでしょう。
わたしは楽しみなのに。

「吉井君、真希ちゃんに雪菜ちゃん。坂本君って学園祭はあまり好きじゃないんですか？」

話合いの邪魔にならない程度の小声で吉井君と真希ちゃんとわたしに瑞希ちゃんが話しかけてきました。

「雄兄は興味ないみたいなんです。だから、率先して作業はしないと思います」

落ち込んだままわたしが言いますと

「そうなんですか……。寂しいです……」

いつも明るい瑞希のちゃんの表情に翳りがさしました。

わたしと同じように楽しみにしていたんですね。

「吉井君と真希ちゃんと雪菜ちゃんも興味がないんですか？」

「あたしはそんなことないかな」

「う～ん、どうだろ？　別にそこまで何かをやりたいってわけじゃないし」

「わたしは楽しみです！」

瑞希ちゃんは小首を傾げて聞いてきたので真希ちゃんと吉井君がそれぞれ言いました。

わたしは目をキラキラさせて言うと瑞希ちゃんに抱きしめられました。

どうしてでしょうか？

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでいいか？」

「え？ウチがやるの？　う～ん……、ウチは召喚大会に出るから、ちょっと困るかな」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？　私ですか？」

突然話を振られて瑞希ちゃんは小首をかしげました。

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる」

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会にでるのよ」

「え？　そうなの？」

「はい。美波ちゃんと渚ちゃんと組んで出場するつもりなんです」

と、手を握り締めて瑞希ちゃんは言いました。

なんだかやる気満々ですね。

「ウチは瑞希に誘われてなんだけどね。」

「そうでしたね、お父さんを見返したいって言って聞きませんでし

たね」

島田さんは苦笑いしながら言うと亮君が瑞希ちゃんを見て言いました。

「お父さんを見返す？」

「はい、家で色々言われたんですよ。『Ｆクラスのことをバカにされたんです！　許せません！』って怒ってるんです」

吉井君の質問に亮君が苦笑いしながら答えます。

「ははっ。バカなのは否定しないが、そこまで言ってくれるなんて嬉しいな。」

「瑞希が怒るなんて珍しいね」

雄兄は笑いながら言うと島田さんも少し笑って言いました。

「だって、皆の事を何も分かっていないくせに、Ｆクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？
許せませんっ」

「あはは（苦笑）」

団体戦はこちらの勝ちでしたけど、個人戦では負けました。
それでも良い戦果にはなっていると思ったんですけど、これだけじゃダメなんでしょうか。

雪菜ｓｉｄｅ　ｅｎｄ

＊＊＊＊＊

亮ｓｉｄｅ

「だから、Ｆクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ」

みぃ姉と島田さんのコンビなら父親の鼻をあかすこともできるでしょうね。

「お前等。こっちの話を続けていいか？」

「あ、ごめん。でも、ウチは召喚大会に集中したいし、勘弁してほしいわね」

雄二は苦笑いを浮かべて言うと島田さんは謝って辞退しました。

「あ、あの。雄兄」

「どうした、雪菜」

おずおずと雪菜ちゃんが手を挙げて言うと優しそうに微笑んで雄二が聞き返してきました。

「わたしが実行委員してもいいですか？」

「それは」

上目づかいで雄二に尋ねると雄二は困っていました。
大切な妹になにもかも押しつけるのは気がひけるのでしょうね。

「雄兄…」

「真希、雪菜と一緒にしてくれないか？」

「かまいませんよ」

雪菜ちゃんの懇願な声で折れた雄二は真希ちゃんに頼みました。
それがいちばんいい方法かもしれませんね。

二人で教壇に立つと周りが静かになりました。
もしや、雪菜ちゃんの効果なのでしょうか？

「クラスの出し物でやりたい物があれば挙手してくださいね？」

そう雪菜ちゃんが言うと数名が手を挙げました。

「はい、土屋君」

「……（スクッ」

名前を呼ばれて康太は立ち上がりました。

「……写真館」

「写真館ですね。」

真希ちゃんはチョークでコツコツと「秘密の写真館」と書きました。

それはおちゃめで書いたのですよね？
本気ではないと願いたいです。

「つ、次は横溝君」

「メイド喫茶……といいたけど、流石に使い古されいると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します」

今度は普通に書いてくれました。

「他にありませんか？はい、須川君」

「俺は中華喫茶を提案する」

須川は立ち上がりながら言いますと

「中華喫茶？　チャイナドレスでも着せたいの？」

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶を出す店だ」

「それもいいね。」

「追加しときますね」

真希ちゃんは須川君の意見を普通に『中華喫茶』とチョークで書きました。

すると、厳つい男が扉を開けて入って来ました。

「お前等出し物は決めたか？」

「この３つです」

「坂本妹が議事進行役か」

「はい」

西村先生は雪菜ちゃんを見て言い、真希ちゃんを見て

「書いたのは、吉井妹か」

「はい」

真希ちゃんは笑顔で返事しました。

「ところで、先生。その後ろにいる方は？」

「あぁ、転校生だ」

僕が西村先生の後ろにいる人を見てから聞くと、西村先生はすぐに答えてくれた。

「優花！？どうしてここにいるのじゃ」

「ちょうど、病院から帰ってきたの」

驚きながら言う秀吉を見て西村先生の影からひょこと顔を出して言った。

でも、他の視線が怖くてすぐに戻る。

人見知りなのでしょうか？

「紹介しよう。彼女は木下秀吉の三つ子の妹で名前は優花という」

そう西村先生が言うとみんなに仲良くしてくれよと言った。

周りの歓喜の雄たけびで優花ちゃんが涙目になり、秀吉が修羅になったのは余談です。

バカテス　アンケート

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください
『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希と姫路亮の答え
『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント
成程、お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。
写真館とかも候補になりうると覚えておきます。

土屋康太の答え
『Hな本（訂正）　成人向けの本』

教師のコメント
取り消し線の意味があるのでしょうか

吉井明久の答え
『カロリー』

教師のコメント
この回答に、君の生命の危機が感じられます。

吉井真希の答え
『恋愛』

教師のコメント
貴女になにがあったんですか？

木下優花のコメント
『秀兄と優姉との思い出』

教師のコメント
久しぶりに出会うのですから当然ですよね

第２１問

「は、はじめまして。木下優花ですっ。三つ子の末っ子です
趣味は絵を描くことと音楽鑑賞です」

秀吉の後ろに隠れたまま優花ちゃんは自己紹介をしてくれています。
過保護になる気持ちがわかる気がしますね～。

「みんな、仲良くしてやれよ」

西村先生はそう言うと周りの皆を見た。

『はいっ！』

僕、明久、雄二、康太、秀吉を除いて笑顔で返事をした男子達。
これで怖がらないといいんですけどね。

秀吉がいるから大丈夫でしょうけど。
僕もちゃんと見て秀吉に報告してあげた方がいいかもですね。

「先生、席はわしの隣でいいじゃろうか？」

「あぁ、その方が安心するだろうしな」

秀吉が西村先生に聞くと西村先生は頷いて答えた。
これで、優花ちゃんの席は秀吉の隣になった。

「それじゃ、これで決をとりますよ～」

「したい方に手をあげてください」

真希ちゃんが笑顔でそう言って、清涼祭の出し物を決める作業をすすめた。
雪菜ちゃんも笑顔で言った。
和みますね～

「まずは写真館」

「これだけですね」

手を上げた人数分だけ真希ちゃんが黒板に書き込みました。

「次はウェディング喫茶です！」

写真館よりは多い方ですけど、これしたい人っているんでしょうか？

「次はゴスロリ喫茶です！」

どんだけゴスロリが好きなんですか！？

僕は絶対着たくないですね。

「次は中華喫茶です！」

次々と書いて行く真希ちゃんを見てから雪菜ちゃんは多数決の結果を見る。

「多数決の結果、ウェディング喫茶に決まりました！全員で協力して頑張りましょう！」

接戦だったが、僅かな差でウェディング喫茶になりました。

僕はタキシードでいいです。

女装は嫌ですしね

『Ｙｅｓ！！　Ｏｕｒ　ｇｏｄｄｅｓｓ』

何か変な合言葉が出たのは気にしない方がいいのでしょうね。

「料理は須川君と」

真希ちゃんが当番を決めようとしていると

「……（スクッ」

康太も立ちあがりました

「ムッツリー二、料理なんてできるの？」

「……紳士の嗜み」

いつから料理が紳士の嗜みになったのでしょう。
そもそも彼が紳士かどうかも不明です。

「まずは厨房班とホール班に分かれてもらいます。
厨房班は須川君と土屋君のところ、ホール班はアキ兄、お願いしますね？」

「うん、わかったよ」

「それじゃ、私達はホールに居ますね」

「そうですね、瑞希達女子と木下君はホールで他に男子で料理できそうな人は厨房に行って、できない人はホールに行ってくださいね」

瑞希の意見に頷いて真希ちゃんがてきぱきと指示をする。

「僕はみぃ姉を見張る為にホールにでもいます」

「あうぅ」

僕はみぃ姉を見て笑顔で言うとみぃ姉が落ち込んでいた。

「では、わたしと優花ちゃんと雪菜ちゃんは厨房にいますね」

「「はい！」」

真希ちゃんが笑顔で言うと優花ちゃんと雪菜ちゃんは笑顔で答えた。

「これで決まりですね。みんな、準備頑張りましょう！」

真希ちゃんが元気良く手をあげて言うと

『おー！！！』

クラスメイトの奴らもテンションをあげました。

第２１問（後書き）

感想評価を楽しみにしております！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4291s/

僕とみぃ姉とＦクラス

2011年10月26日12時59分発行